

あの頃の俺たちはまるで、透明な金魚鉢に沈む、ガラス玉のようだった。脆く、すぐ砕けそうなのに、瑞瑞しく、宝石のように輝く。お小遣いでも簡単に買えそうなのに、絶対に手に入れることはできない。あのガラス玉は、今もこの胸にあるだろうか。

夏も終わりに近づいた八月の末。まだ暗い早朝に、寝室の開けたガラス戸から朝のひんやりとした空気が流れ込んで目を覚ます。まだ早い、と思いい目を閉じようとするが、なぜか意識がはっきりとして眠りにつけない。どうしてだろう、と頑張っではみるが、どうしても寝つけない。前の日に飲んだビールのせいだろうか。いや、そんなに多く飲んだわけではない。いつになく気持ちが浮き沈み、はしゃいだせいかもしれない。

しばらくすると、ガラス戸の向こう側のベラン

2/60  
の黒猫の親子には、どことなく親しみを感じていた。しかしその子猫もどうなったのか、よく分からない。

音の主を確かめたく思い、布団に寝転んだまま考え始めた。ベランダに出て見ればいいだけのことだが、そんな不躰な行為はしたくない。

さて、どうしたものか。

とにかく何匹いて、どんな行動をするのか見てみたい。そのときにはもう、眠気は完全に消えていた。ミルクをベランダの端にそっと置いてみることにする。暗がりの中、人の気配を失ったキッチンまで行き、適当な器を探して、冷蔵庫のミルクパックを持つ。だいぶ前に買ったはずなのに、減りが少ない。器にタプタプとミルクを注ぎ入れる。そのまま部屋を横切り、ベランダの隅のガラス戸を開け、そっと器を置く。ついでに、ベランダの状況確かめに顔を突き出すと、黒い影が一つ。あまりの暗さに、それが何なのか判別ができない。仕方なくガラス戸を閉め、部屋の中でじっと見ていると、黒い影が動き、近づいてきた。や

ダから、トタトタトタ、と柔らかな物音に気づく。ん？と耳を澄ますと、しばらくしてまた、トタトタトタ。何かが走るような不気味な音に聞き耳を立てると、なおいっそう寝つけなくなってしまった。聞いていると、トタ、の合間に、シャッ、という爪が擦れたような音がする。

猫？

そういえば、近所に黒猫の親子がいたことを思い出す。生まれたてのときは、確か小さな子猫が三匹いた。

子どものころ、お魚くわえたドラ猫はいなかったが、野良猫は当たり前にいた。屋根裏ではネズミが運動会をしていたし、野良犬もいた。ときに野良犬は恐ろしいほどの群れをなしていることもあった。ところが最近では、本当に見かけない。危険であるとか、衛生面で駆除が進んだ結果だろう。それはそれで安心といえなくはないが、どこか町が不自然な気がしてならない。生き物がいても、駆除のしようがないカラスや雀などの鳥獣くらいだ。野良猫も少なくなった。だから逆に妙に、そ

はり猫だ。匂いを嗅ぎつけてか、器のミルクを舐め始める。しかし、何度か舐めるたびに、こちらを伺う。暗くて目が合っているのかどうかすら分からぬが、警戒しつつ、また舐めはじめ、しばらくするとまた警戒してこちらを伺う。幾度か繰り返していると、背後から黒い影がもう一つ現れた。その少し小さめの影が器に近づき、やはり舐め始めた。どうやら先のが親猫で、後のが子猫のようだ。子猫は警戒することもせず、ひたすらミルクに夢中になった。そんな姿を確認して、暗がりの部屋を後にした。確か三匹いたはずの子猫。残りの二匹はどうなったのか。親元を離れたのか、厳しい環境の中で淘汰されたのか。

不思議にも、そのあと、トタトタとベランダを走り回る音は、ピタリとなくなった。少し明るくなり始めたところに器を見に行くと、一滴も残すことなく、洗ったかのように綺麗にたいらげられていた。ベランダの反対側を見ると、お腹が満たされ気分も落ち着いたかのように、大小二つの黒い影が寄り添うように朝日に照らされていた。

ひと月前のことを思い、前夜のことを思い、今日という日と思う。

いつか、娘の杏奈が尋ねてきた場面を思い出す。

「ババ、狭山事件で何？」

どこでそんな情報を？と考えたが、やはりSNSなのだろう。部落差別のことは伝えていたので、狭山事件と部落差別について、大まかにサラリと説明をした。最後に、生まれたところで差別されるっておかしいだろ？という言葉を残して。こうやって子どもには勝手に情報が入ってくる。部落差別を知っている大人は、子どもに何と説明するのだろうか、と考え込む。

あれは中学のときだったか。高校生が集まる全国の集会があるとかで、大型バスに乗せられて高知県へと向かった。俺たちにすれば、それが何の会であるかとか、どこに行くかとかは、あまり関係なかった。ただ仲間連中みんなと大勢で、遠足気分で出かけられれば、それでよかった。

そんな気分のまま参加したからか、現地に到着

事件について少しずつ関心を持ち始め、学ぶようになった。といってもそれも高校時代までで、高校を卒業してからは、たまに特集記事や裁判経過の記事として新聞に掲載されていたり、ネット検索で見かけたりするくらいになってしまった。恥ずかしい話、積極的に取り組んだりかわったりしてきたわけではない。それでも気になり続けたのは、「見えない手錠」というワードからだ。

見えない手錠――

石川さんの手には手錠が、足には足かせがはまったまま。今もなお、だ。それを拷問と言わずして、何を拷問というのか。人の人生を奪い、縛りつけておいて。しかしその見えない手錠を、足かせを、同じように俺もずっと感じ続けている。感じないようなふりをしながら、毎日を過ごしている。実際には感じていないときだってある。そうそういつも感じながら生きてるわけではない。しかし、忘れたわけでもない。いつもどこかに、刺さった棘を感じている。その棘は、何も感じないときもあるのに、急に存在感を増して違和感と

してバスから降りるとき、「これを着けるように」と手渡されたゼッケンに驚いて、気持ち引いた。黄色地のゼッケンに、強烈に主張するような赤と黒で、「狭山差別裁判糾弾」「部落解放基本法制定」と、書かれていた。その文字の示す意味はあまりよくわからなかった。だが、降車場でいくつものバスから降りてくる大勢の高校生みんなが同じようなゼッケンを着けていると思うと、そうするものなのか、と自分をなだめた。それでもどこか、着ている服と着けているゼッケンは密着している気がなくて、少し体から浮いているような気がした。

その日、全国から集まった高校生がひしめき合う会場のステージで見上げたのが、石川一雄さんだった。狭山事件の石川一雄さんだ。そのときの会場の反応は異様だった。今思えば理解はできる。無期懲役刑のまま仮釈放となつて、初めて俺たち大勢の前に現れてきたのだから。それでも、まだ十分に学習できてなかった俺からすれば、その雰囲気は異様に感じられた。そしてそれ以降、狭山

なり、ズキズキと痛むときもある。抜こうにも指は届かず、イラつくがどうしようもなく、自然に収まるのを待つしかなかった。ただひたすら、待つしかなかった。

それは俺だけじゃなく、他の連中もそうだった。そんな話でもできればまだ良かったが、できない中で毎日をやり過ごしてる連中だったくない。そんなことを当事者ではない周りの奴らは分かっているのだろうか。棘なんか抜いてしまえばいいじゃない、そもそも棘なんて刺さってるの、と言う奴もいそう。だが、そもそもその一言が棘であり、誰が刺しているのか、と訊き返したくなる。被害者面したいわけではない。同情してほしいわけでもない。ただ、そう思ってしまうのだ。そう思ってしまう俺の方が悪いのだろうか。

ひと月ほど前、俺は中学生集会の舞台に立った。中学生集会は、俺たちが中学三年生のときに始まった、中学生のための人権集会だ。つまり、俺たちが初代であり、その実行委員長も、俺たちの仲

間内から出た。だからかれこれ二十年以上続く。そんな集会にあらためて来て話をしてみないかと誘われたときは、正直断り切れず引き受けたものの、逡巡としていたりもしていた。何を話すのか、どこまで話すのか、それは俺自身をさらけ出すことに、俺自身をカミングアウトすることになるのではないか。今まではそれがあたり前だった。独り身なら構わない。しかし今はパートナーの季実子がいるし、小学四年生の娘杏奈もいる。俺だけの問題では済まされない。それでも自分の出自を晒すなら、それは自分勝手な振る舞いになるのではないか。季実子や杏奈にとってのアウトイングになるのではないか。季実子や杏奈の責任まで負えるのか。その人生まで背負えるのか。それとも出自のことには触れずに、当たり障りのない話をするか。いや、それはこれまでの自分の生き方に反する。

だがしかし、そもそも隠さなければいけないことか？ 恥ずべきことなのか？ 恥ずべきは誰だ？ 俺か？ 違う。そんなことはない。恥じる

体で学び合った部落問題学習、全体学習について語りはじめた。そして話は、中学時代からの親友、卓也に起きた差別事件へと進んでいった。

\*

卓也という友達がいて、今もつながっています。あるとき、その卓也の家に、「あんたのところ部落だろ。」という電話がかかってきたことがあります。当時卓也は一人で電話対応をしていました。それで卓也から自分のところに電話がかかってきて、「こんなこと言われたんやけど。」って。これは一切大人は関わってません。子どもだけのやりとりです。

それは、自分たちだけで処理できる話でもないし、そのまま傷つくだけで終わってしまいそうな気もするじゃないですか。だから、「親に話した方がいいんじゃないか。」っていうようなやりとりをして。

何が言いたかったかというと、やっぱりしんどいときとか抱え込んだときに、誰かに言える関係性っていうのを持つべきだっていうことを、すごく

ようなことは何一つない。なのに隠す必要があるのか。普通に、堂々としていればいいだけのことではないか。俺のアイデンティティの一つとして、学生時代に学んできたことが今の自分を縛りつけ、そして解放する。

季実子はストリートダンス仲間だった。そのジャンル性からか、俺たちは既成概念や固定観念に沿うことを拒絶する一面がある。下らない、理屈に合わないことを嫌った。そして惹かれ合い、愛し合い、結婚した。季実子の両親は、部落出身である俺を、「別に構わない」と受け容れてくれた。しかし、祖父母はそうではないらしい。だから波風を立てぬよう、静かにそっと、何も言わないまま。だがこれから先、中学生集会をきっかけに、いろんな場で自分のことをしゃべるとなると、話は違ってくる。結婚は構わない。が、そのことに触れてあちこちで出自を明らかにしていくことへの抵抗は、また別の問題となる。

そんな不透明で、はっきりしない状況のまま、俺はまず、自分が中学生時代に経験した、学年全

思っています。今も思っています。

\*

その電話は、俺たちが中学三年の、よりによって「母の日」にかかってきた。

卓也は「母の日」に、今日くらいは母さんを休ませてあげよう、と妹と一緒にになって、夕食のカレー作りを楽しんでいた。それだけで、彼のやさしさ、家族を大切に思う気持ちが伝わってくる。そんなところに、電話はかかってきたのだ。

卓也はその日の出来事を、ノートに残している。

\*

やっぱり悔しかった。つらいなーって思った。今日ボクは生まれて初めて、全然知らない他人から部落差別を受けた。ずばーっと受けた。

家に電話がかかってきた。親は二人で出かけていて、ボクは妹と一緒にカレー作りを楽しんでいた。

電話の内容はこうだ。「ちょっと調べてるんだけど、あんたのところ、同和地区だろ。部落だろ。」というものだった。

ボクは、「えっ、すいませんが、そんなこと聞いて何になるんですか。」とか、いろいろ対応したけど、「部落なんだろう。」としか言わなかった。

「ブラク違っ、エッタだろ。」

ボクは思わず、「そうだったらどうしたんですか。」と言ってしまった。

プーッ、電話が切れた。

＊

エッタ――

卓也は言葉を失った。激しく動揺した卓也の受話器を持つ手は冷たく固く、凍りつく。

＊

何なんだったって思った。悔しかった。自分の顔が真っ青になっているのが感じられた。これが部落差別なのか。これがボクが受ける差別なのか。本当にビビった。いったい何なんだ、これは。

みんなに打ち明けたかった。でも、こんなしんどいことでみんなが悩むのなんて、ホント馬鹿らしい。こんな思いをするのは、ボクだけでいいと思った。

人間不信から一人に、一人から二人に、二人から家族に至るには理由があった。それは、俺たちが部落問題についての学習を徹底して学んできていたからだ。俺たちは友人を巻き込み、家族を巻き込み、教師を巻き込んで、この問題について徹底して語り合う部落問題学習を繰り返してきた。部落差別が、日常の家庭の会話にあること。あの橋を渡って遊びに行っていないと言われたこと。あそこの子とは友達にならないように言われたこと。友達まででないが、恋愛や結婚はダメだと言われたこと。被差別の劣悪さではなく、加差別の醜さが赤裸々に語られる学習を通して、それぞれが自問自答を繰り返し、人間としてあるべき姿を共に見つめ合う学習を積み重ねてきた。夕食時、食卓を囲むと、卓也は重い口を開く。

＊

親に言った。「何でも困ったことを話せるのが家族じゃない。」と母さんが言ってくれた。嬉しかった。

でも、悔しかった。絶対卑怯だ。言いたいこと

＊

混乱する卓也は、言葉を、どす黒い塊のすべてを飲み込もうとする。が、喉元から飲み下せない。戻ってくる苦さを飲み込もうとしても、また口元に戻ってくる。それが消化できないことが分かっていたからだ。

＊

人間で馬鹿だなんて思う。なんでこんなことにこだわるんだって感じた。ボクは人間不信になつてやろうと思った。

とにかく、悔しかった。全然笑えなかった。考えた。一人で考えた。悔しかった。自分も含めてみんな馬鹿だつて思った。

真二に電話した。真二もビビッていたけど、一緒に慰め合った。ちよっぴりパワーが出た。やっぱり親に話そうと思った。

＊

あとき、少しだけ、ほんの少しだけ体温を戻した卓也に浮かんできたのが、俺だった。そして卓也は俺の言葉を素直に受けとめた。

だけ言つて電話切つて。ムカつく。

母は言った。

「そんなことを言う人は悲しい人間なのよ。そんなことに負けたらアカン。世の中、そんな人ばかりじゃない。落ち込んだら負けよ。」

＊

母親の胸に潜んでいたいくつもの切り傷が浮かび上がり、じっとりと血が滲む。いつかそんな日が来るのかもしれないと思っていたが、こんな形で訪れるとは思ってもいなかった。

母親もまた結婚の際、自身の両親から部落差別を投げつけられていた。それでも自分の信じた道を進もうと、両親への断ち切り難い思いを断ち切って、部落出身の父のもとに飛び込んできた。そのときの胸の傷は癒えることなく残り続け、浮かんで疼くのだ。

父親は聞くとすぐに不機嫌になり、食事もそこに席を立ち、別の部屋に行ってしまった。常は人を笑わしてばかりいる愉快な父親のそんな姿は、卓也にとってもつらく悲しく、悔しい思いに

させた。「そんなに俺が悪いのか」、父の背にはそう書かれていた。父の辿ってきた人生の悲哀が見える。父だけでない。父につながるたくさんの人々の悲哀が見える。

母は、自分を奮い立たせるかのように、卓也に声をかける。確かに、自分の身を慮って声をかけ励まし、支えてくれた人たちは大勢いた。だから、決して虚勢ではない。だがそれでも、我が身を切られることと、我が子の身が切られることはまったく別次元の話だ。我が身が切られることならまだいい。自分が我慢をすればいいだけのことだ。しかし、愛する我が子の身が切られることは我慢ができない。耐えることができない。

卓也は夕食後、行動を起こす。

\*

ボクは、ずっと電話を待った。今も待っている。もしかしたらまたかかってくるかもしれない。もしかかかってきたら、今度こそは言っていることのおかしさを分かってもらおう。部落差別のおかしさを伝えよう。でもかかってこない。その人は

爆発しそうになる。

一度は、「誰にも言うまい」と誓った卓也は、この出来事をノートに記すことを思い立つ。電話機の前で正座をしたままうずくまり、逸る気持ちを抑えながら、文字の一つ一つを確かめるように、強い筆圧の濃い文字がノートに刻まれていく。

翌朝、ノートは担任教員に手渡され、この事実は学校の知るところとなった。

語りは卓也に起きた差別事件から、自身の職場で起きた差別事件へと移っていく。

\*

俺が社会人になったときも、やっぱりそういうのがありました。二十年ぐらい前、会社で落書きをされて。「エッタはさわるな」と、筆箱とかペンケースとかに書かれてたりするわけです。

目の前にしてやっぱ腹立たしかったし、中学校のときにしっかりと勉強したつもりだったので、「そういうのはいけない。」という話をするわけです。

けどやっぱ心底悔しかったし、なんで、なんで

差別しているのに。

会いたい。でも、これが部落差別なんだ。ボクは開き直ってしまいそうになる。

ボクの解放運動。本物の解放運動。差別者の意識を変えるのが運動なんだとボクは思っている。いろんな子にこのことを話していこう。

\*

両親に話した後、すべてが寝静まり返った夜、卓也は遅くまで、電話機の前で待ち続けた。薄暗い廊下に座り込み、壁にもたれかかる。かかってくるなどあるはずがない。常識的に考えれば、それでも卓也は、鳴らない電話機の前で待ち続けた。自分がおかしいのだろうか。間違っているのは自分の方なのだろうか。いや、とかぶりを振る。間違っているのはこの人だ。しかしこの人は、どうしてこうなってしまったのか。いったいこの人に何があっただろうか。こんな思いにさせてしまったのはいったい何なのか。激しく憤る気持ちと、相手の背景に迫ろうとする気持ちが交ぜになり、ぶつけようのない怒りが封じ込められ

生まれた所だけで差別されなアカンのかっていうのが、すごくありました。

\*

——お前に俺の、お前に俺の何がわかる？

泥まみれの襟を、思いっきり投げつけた衝動に駆られる。実際はしていたのかもしれない。心の中では。実際にした人間もいただろう。手を出したら負け。そんなことは百も承知の上で、それでも手を出さずにはいられない衝動に駆られるのだ。体内で、胸底で暴れまわる野生の獣を無理矢理にでも抑え込み、「お前」に迫る。

お前の学校の先生はいったい何をしていた。

そう思わずにはいられなかった。自分たちが受けてきたような部落問題学習を受けてきたのか。いや、そうではなかったのだろう。冷静に、客観的に見て、自分たちのような学習が他ではされていないことを、何となく感じ取っていた。つまり、されてないわけではないのだろうが、他のところでは残念ながら、自分のなかにあることをとことん本音で語り合うような学習ではなかったのだろ

うことを理解していた。それでは形だけの学習に  
 しかならない。そんな、差別を当たり前にしてし  
 まうような教育が認められていいわけがない。こ  
 の現実を、こいつらの先生に知らせたい。知って  
 おいてほしい。責めるのではない。追いつめるつ  
 もりもない。ただ、知っておいてほしい。そう強  
 く思うのだ。

舞台から、眼の前の中学生を見つめる。かつて  
 自分もそうだった中学生が、俺を見つめる。その  
 まっすぐな眼差しに偽りは感じられない。迫って  
 くるいくつもの眼差しに向けて、部落差別がなく  
 なっていないことを、メッセージとしてはっきり  
 中学生に伝えておきたい。伝えたいうで、本当に  
 自分事として捉え、考えてほしい。そんな人間が  
 増えることが、必ず娘のためになるに違いない。  
 自分たちと同じ思いをするのか、それとももう一  
 つ高い次元の人生を歩むのか。自分の生き方に  
 かっている。そう強く信じるのだ。

ところが、真二が伝えたかったのは、その場に  
 いる大勢の中学生だけではなかった。本当に伝え

泣くまい。涙は見せるまい。そもそも泣く必要  
 などない。泣くこと自体がおかしいのだから。泣  
 くか。泣いてたまるか。思えば思うほど、こみ上  
 げてくるものが抑えられない。

自分が部落出身であるということを、娘に伝え  
 るのが、すごく怖いんです。なんか、その部分に  
 関してすごく怖かったんです。

いま、小学四年生なんです。すごく怖くて。繊  
 細なだけに、どう思うんだろうとか、どう向き合  
 うんだろうとか、自分の中で葛藤が何年も、何年  
 も何年もありました。産まれてからも、どうなん  
 だろう、いつ言うんだろうっていうのがすごく。  
 大切な子どもに対して……。

真二は結婚後、生家のある町から離れた、県都  
 のある市の中心部で新しい生活をスタートさせた。  
 そのことについて特別な思いはない。我が故郷を  
 格別離れたかったわけでもなければ、絶対に残り

たかった相手とは――

部落問題を考える、同和問題を考えるっていう  
 のは、素晴らしいこと、すごいことだと思ってい  
 ます。けど、裏を返せば口惜しさがあるというか……。

言おう、言おうと思いついてきた。しかし言  
 う意味があるのだろうか。言わなくてもいいので  
 はないか。わざわざ言う必要があるのか。言うこ  
 とでこの子を苦しめることになるのではないか。  
 いや、この子が苦しむことの方がおかしい。苦し  
 めているのはいったい誰だ。罪なき者が背負うこ  
 とか。

言おうとして、喉元でつかえる。それを無理  
 矢理に、押し出すように、吐き出す。

今日は泣いたらアカン理由があつたんです。何  
 か特別な日になるって、今日は思ってたんです。  
 来る前からずっと……。

たかったわけでもなかった。ただ自然に、流れの  
 中で今の暮らしを始めた。だが、周りの同じ立場  
 の部落の仲間のなかには、いろんな思いで残った  
 奴もいれば、離れた奴もいる。

地元に残ることは、「とりあえず」守られること  
 になる。だからといって、いつかまた試験の時が  
 くるかもしれない。問題を先延ばしにしているだ  
 けということも分かったうえで、地元に残ってい  
 るだけにすぎない。

離れた者の思いはなお複雑だ。自分のルーツを  
 示すものは、示さない限り見えることはない。つ  
 まり自分の口に蓋をし、自ら言うことさえしなけ  
 れば、表面上は関係ないものとなる。部落から逃  
 れようと思えば逃れられる。そうして過ごしてい  
 る奴もいる。だが同時にそれは、己に背くように  
 も感じてしまう。何の罪も犯してないのに、自ら  
 を罪人扱いするに等しい感覚になる。そして、部  
 落の話題が周りから出たら、それに調子を合わせ  
 る。または、聞いて、聞いていないふりをする。  
 そしてそのことを誰にも言えない。言えないと、

自分のなかに泥が溜まり続けていく。その泥を抜け出ようとすると、抜け出そうにも足をとられ、どんどん沈み込んでいく。もがけばもがくほど深みに嵌っていく。手を伸ばしても、その手がいたい何を抱もうとしているのかすら分からなくなる。ただ宙を掴み、藻掻くだけだ。

では逃れずに、自らのルーツを示す生き方をしている人間がどれだけいるか。それは、ほぼゼロに等しい。いないわけではない。しかしそれはあまりにも少なすぎて、ゼロに等しい。みんながせーので言えればどれだけ楽か。心強く頼もしいか。

言わないことはどこか、罪悪感を感じさせる。なぜだろう。正しさから言えば、言うべきなのかもしれない。しかし、言えない。言えないことは卑怯なのだろうか。人を信頼していないことの現れなのだろうか。自分の弱さなのだろうか。自分がいけないのだろうか。しかし、そもそも本当に言わなければならないことなのだろうか。自分が間違っているのだろうか。自分の存在がいけないのだろうか。自分は存在してはいけない人間なの

だろうか。

\*

でもそれは明らかに自分の中で、この子が差別されてしまうっていうことを前提に描いてしまっているからダメなんです。差別に対して向き合うことをしておかなかつたら、まず親としてダメなんだと思うんです。

\*

時代は変わったか。自分の中にある本心を告げても、本音を言っても不利益とはならない時代は来ているのか。集団に個を埋没させ、個が合わさなければならぬような時代ではなく、集団の中で個が大切に認められる時代となっているのか。SNSの世界はどうか――。

差別をしない生き方、では弱い。しない生き方自体は大切だが、それだけでは決定的な何かが足りない。消極的解消で終わってはいけない気がする。それでは、いつか何かが起きたとき、すぐに潰れてしまいそうな気がする。

人生は無風のときばかりではない。あたり前に

風が吹く。追い風ならいいが、向かい風のこともある。真っ直ぐ立って歩いていては、後ろへ倒れる。だから自ずと前傾姿勢になる。しかし、前傾姿勢になれるだけの力がないと、それはできない。向かい風が強ければなおさらだ。そのための体力をつけておかねばならない。それがなければ、歩くことはおろか、立ってさえいられない。後退するしかない。倒れるしかない。もっと言えば、無風状態でも歩けば向かい風になる。であるならば、それだけの足腰を鍛えておかねばならない。その力をつけていないから、つけられている自信がないことが自分で分かっているから、不安に支配されるのだ。それは、親の務め以外の何ものでもない。親としてできる、親にしかできないことではないか。娘への不安は、そっくりそのまま、自分の不安の現れではないか。自分がその責任を果たしていないから生じるのではないか。しかし、そのことに向き合うことが如何に重く、尊いか。向き合うべきは、自分。

\*

あのね、それで、決めたんです。伝えようって。でね、今日連れてきてるんです。

\*

会場の目が一斉に、小学四年生の姿を探す。

真二が座っていたパイプイスの横で、杏奈はひとり座っていた。父が座っていたイスには誰もいない。真二は今、舞台にいるのだから。それでも杏奈は、隣に父が座っているような気がしていた。姿は舞台にあるのに存在は、体温を感じるすぐ傍にあった。父が今、自分のことをしゃべっている。自分のことについて、自分の体内にふれて、伝えたい何かを、伝えたい思いを伝えてくれている。自分への真剣な思いを話している。

杏奈の胸にほのかな光が姿を現わす。光はわずかな筋となり、ゆっくりと立ち上がる。

真剣さには真剣さを。思いが、杏奈の背骨に宿る。

\*

小学四年生ですけど、娘に今日来るこの意味、中学生集会に連れて来るこの意味、中学生集会

に来ることの意味、話をするこの意味っていうのを、ただ単に來ただけではたぶん何にも伝わらないと思って、その段取りをして、來たんです。

\*

俺にとっては、この一瞬のために、杏奈と関わるこれまですべての時間を費やしてきたと言ってもいい。部落を、決してマイナスに捉えさせたくない。マイナスの出会いにたくない。逆に、マイナスと思えるようなことのすべてをひっくり返し、プラスにすらしてしまいたい。伸るか反るか、ギリギリの大勝負に向けてしてきた準備について、静かに語り始める。

\*

二日前、娘の学校に行ってきたんです。夏休みの個人懇談があつて。娘の個人懇談はいつも俺が行くんです。娘には、「パパ、何言われるか分からないから覚悟してよ。」って言われつつ行つたわけですけど。

先生とテストのこととかいろんなことを話したあと、個人的に言つたんです。「この日曜日、実は

か。差別のなかを懸命に、誠実に生き、育ててくれた父への思い、母への思い。部落差別をはじめとする様々な差別問題について、とことん本音で語り合ってきた中学時代の友への思い。そして、今も残る、あの懐かしい景色、故郷への思い。そのことを語らずして、学校の先生に分かつてもらえることはない。そう考えたのだ。

そしてその奔流はそのまま、校長室へと向かっていく。

\*

そのあと校長室に行きました。校長室に行つて、勇気振り絞つて、「実は部落出身です。」つて。そして校長先生、こう言いました。

「部落問題、同和問題、これが授業から遠ざかっているのが悔しくて仕方がない。どうしてこれをもっとベースにして話し合いができないか。校長をしながら悔しくて仕方がない。」

そう言ってくれました。それですごく話しやすい空気になって。自分と校長先生がね、涙涙の会になって。すごい安心したというか、そういう思

中学生集会つていうのがあつて、自分ちよつと行くんですよ。なぜかという、自分は部落出身の人間で、そこに対してすごく誇りをもって、中学生のみんなにいろんな思いを伝えたい。娘にもちゃんと伝えていきたい。」つて。そして個人懇談がね、娘の個人懇談じゃなくて、自分の個人懇談になってしまつて。娘には申し訳ないと思うんですけど、終わった後、すごいスッキリした気持ちになりました。言つて良かったなつていうか。

\*

杏奈が俺のルーツを知ったとき、ショックを受けて自暴自棄にならないか。困惑し、ひとりで見込まないか。友達関係や自分の将来に悲観し、苦悩しないか。もしそうなったときのため、学校の先生にもサポートしてもらいたい。しかし、サポートしてもらうためには、自分のなかにどんな思いがあるのかを知つておいてもらう必要がある。つまり、自分の胸の奥底にある部落差別への思いをしっかりと語っておかなければならない。どんな部落差別を体験し、どんな思いで生きてきたの

いの中でやってくれる、関わってくれるつていうのが嬉しくて。

それで、「絶対に娘さんを守ります。」と。「何が何でも守ります。」と。

安心しました。娘の周りにはすごい思いのある先生がいるなつて思つて。でもそれは聞かないと分らないことで――

\*

一步を踏み出す勇氣。思えばそのことを、中学時代に徹底してやってきたように思う。

中学一年、秋も終わりに近づいたころ。全体学習が開かれたことがあつた。そのときは全学年が体育館に入り、部落問題についての学習をした。友について。

死ぬということ、生きるということについて。人を好きになるということ、告白するということ、恋に破れるということについて。

父母について、故郷について。

みんながそれぞれの思いを語っていく。学年を



越え、立場を越え、語っていく。部落差別への思いを語っていく。

「どうして生まれたところだけで差別をされなければいけないのか。」

俺たち一年の発言に、三年が返す。

「一年の言葉がきれいことに聞こえてすごく腹が立つ。もっと真剣に考えてほしい。」

三年の言葉に一年が応答する。

「軽くなか言っていない。自分たちも真剣に考えて言っている。」

似たような本音が繰り返されるうち、三年女子の先輩が言った。

「うちのお父さんは部落で、お母さんは部落外で。そんな両親に生まれた私のことを、お父さんは『あいの子』と呼ぶ。けどそれは、そんな言い方はしてほしくなくて。私はお父さんの子どもで、お母さんの子どもで。部落とか部落でないとか関係なくて、二人の両親の子どもで。」

そのあとは、涙でよく聞き取れなかった。けど、その子がずっと抱え込んできた苦しい胸の内はち

間に、学年の仲間に、学校の仲間に。そのうち、先生までがそれに応えるようになっていった。

耳の不自由な弟について語る先生。

農作業で泥まみれだった父親を語る先生。

産まれることが叶わなかった命について語る先生。

部落に生まれたことを熱を込めて語る先生。

応えられない中学生の沈黙に堪えられずに、先生が先生自身のことを語っていった。それは、先生が俺たちを信じようとしてくれた証だったような気がする。そしてそんな先生の言葉に触発され、俺たちもまた言葉を返していった。それは、先生を信じる、というメッセージのお返しであったように思う。そうして、先生と生徒という隔たりは消えていった。それは、人間対人間として思いを吐き出し合う、ぶつけ合う、仲間としての存在でしかなかった。そんなときは必ずのように、光の筋が絡み合いながら天めがけて伸びていた。

そんな俺たちがしてきた全体学習が、一度だけ

ちゃんと伝わってきた。本当に真剣に考えないと、と感じた。

授業の最後の方だったように記憶している。「もっと真剣に考えてほしい」と言った三年が再び手を挙げた。

「さっき、一年にきれいことって言ったけど、ちょっとそれは間違っていました。悪いこと言たなっていると思います。ボクも一緒に部落差別をなくしていきます。さっきはすみませんでした。」

その潔さに、脱帽した。それまで張り付いていた仮面のようなものが剥がれ落ちた気がした。本音で語り合うことで、立場や学年を越えてつながれた喜びを感じた気がした。無数の光の筋が体育館の天井を突き抜け、天に向けて伸びていくような気がした。二つ上のサッカー部の先輩の言葉だった。

「みなさんはどう思いますか。どう受けとめましたか。」

あのころ、よく問いかけた言葉だ。クラスの仲

反論を受けたことがあった。中学三年のときだ。反論をしてきた相手は、他校の中学生。俺たちが部落問題について語り合っている全体学習を参観していた、他校の生徒会長やその取り巻き連中だった。

「俺から言わせてもらえば、まだ十四歳や十五歳にしかない自分たちが部落問題を考えても難しいし、はっきり言って『自分は差別をしない』と思っただけでいいんじゃないですか。」

部落問題は歳を取らないと分からないし、たった十四歳や十五歳で悟っても仕方ないし、答えが出るわけでもない。大人だって、この歳で部落問題や分からなかったんじゃないですか。今はこんな勉強をするよりも、もっと友達を作って、いっぱい遊んで、そういった差別を吹き飛ばせるようにすればいい。それに、教科の勉強と人権の勉強を両方一生懸命頑張るといことは難しいから、どちらかを優先しないといけない。どちらかに絞った方がいい。両方やられれば、それこそ今の子どもは忙しくて、頭を抱えて、いじめや自殺をす

るようになると思う。」

確かにその通りといえばその通りだ。今の子どもは忙しい。しかし、だからといってそれが、中学生はしなくてもいい、という理由にはならない。それに、「自分は差別をしない」と思うだけで卓也は救われただろうか。問題の解決につながっていっただろうか。俺たちには卓也のカレー事件があったから、当事者が思っているだけでは駄目だ、という確証のようなものが生まれた。さて、どう答えればいいのか。

自画自賛になるが、あのときの俺たちの「返し」は、見事だった。今でもそう思う。

誰からともなく、「その通り！」とばかりに賛同の意見を述べ始める。つまり、相手を否定しなかった。わざとではない。本当にそう思ったから、そう言った。俺たちはカレー事件に遭遇したからこそ共感的に捉えることができたが、そんなことでもなければ同じ思いになっていた可能性は大いにある。だから、確かに共感できるのだ。否定はできない。そのことを何人もが述べていくうちに、

ではなぜ自分たちはこんな学習をしているのか、という疑問にぶつかった。そうやってみんなが、ハタと立ち止まったのだ。我に返ったといってもいい。そのとき、同級生の千尋が手を挙げ言った。

「好きだからしている。私はこの学習が好きだからしている。部落差別は許せない。あってはいけないと思う。でも、部落差別のおかげで、私はこの学習に出会うことができた。この学習に出会ったおかげで、友達の知らなかったことが見えてきたり、友達のことを真剣に考えたりできるようになった。そうなれた今の自分のことは好き。部落差別はあってはいけないけど、この学習はあってよかったって思ってる。この学習に出会えてよかったって思ってる。こうやってみんなと語り合うこの時間が、私は好き。」

まさにその通り、と拍手しそうになった。彼女の言葉に応えるように、またしても何人もが賛同の発言を繰り返していった。

そのときの風景はまるで、大きな両掌で、ゆっくりと会場全体を包み込んでいくようだった。決

して鋭い槍の先で突き刺すのではない。それはあたたかく、やわらかだった。そのときにも見えた。光の筋はまどろっこしくもあるが、行きつ戻りつしながら、手を差し伸べるようにその歩みを整え、ゆっくりと伸びていくようだった。

授業の最後に、他校の生徒会長があらためて手を挙げた。

「俺は、みんなみたいな熱い関係をうらやましく思いました。最後に、今日は本当にありがとうございしました。」

光は、結ばれた。

授業には、いつも何かの教材はあった。だがしかし俺たちはいつも、その教材を通して自分のことを語っていた。友のこと、クラスのこと、自分の家族のこと、過去の自分のこと。それが教材とどうつながり、何を学んだのかを語り合った。結論が特にあるわけではない。ただ、そういう時間に心地よさを感じていたし、とにかく考えていた。そうやって俺たちは俺たちを変えてきた。変えてきたというより、いつの間にか変わってき

た、という方が正確だ。一人一人単体ではまったくもって不完全な存在だが、大勢が合わさって語り合い議論していくと、いつの間にか望ましいような解答にたどり着く。別に誰かが狙ってその方向に誘うわけではない。いつの間にかその方向にたどり着くのだ。だから、語り合うことは不思議であり、楽しかった。

時間はかかる。面倒と言えば面倒だ。おそらく、相当な回り道もしているのだろう。しかし、だからこそ楽しい。みんなで時間をかけて歩く、その道程が楽しい。在る道を歩くのではなく、道なき道を歩いた後に道ができることが、楽しい。だから、俺たちは語り続けてきた。それはまるで、幾本もの光の筋が同じ方向に向かって進んでいるような感覚だ。光の色はそれぞれで、筋の太さもそれぞれで、進み方もそれぞれ。ときに遅くなったり、速くなったり、違う方向に逸れたり、絡まったりもする。かといって、一本に合わさることもない。同じになることを誰にも強要されないし、それぞれの筋はあくまでも独立した存在で、同じ

方向に向かっていることに変わりはない。答えのない問いにみんなが向き合っているような感覚――

まるでそんな感覚だった。そのことが心地よかった。だからこそ俺は、俺たちがやってきた部落問題学習に自信と誇りを持つ。自信と誇りを持つのだが、それでも世の中の荒波は容赦がない。自分に自信と誇りを持っても、それは娘杏奈のものではない。様々な困難を俺が撥ね返しても、杏奈が撥ね返せないという意味がない。それをどうにかしたいのだ。それをどうにか。

\*

自分の中では、ここまでしなくてもいいんじゃないかと思う部分でも、ここまでしないとアカンの違うんかなって思ってしまうんです。というのは、中途半端な情報がいっぱい流れすぎてから――

\*

ネット上を浮遊するフェイクニュース。それをそのまま鵜呑みにし、簡単に扇動される社会。今

過剰であるように思われるかもしれないが、我が子を守るということはそういうことなのだと、今さらながら思わせられる。そうやって俺たちは守られてきたのだ。

小学校まで同じ部落で、中学校から町外の私立中学校に進んだ女の子がいた。父親は町議会のえらいさんだった。つまり、町の有力者だ。その女の子は父親にとって、きょうだいのなかでも歳の離れた唯一の末娘だった。互いに大人になって話をしたときのこと。今も耳にこびりついて離れない。

「うちの父さんは、私を何とかしてこの差別から遠ざけようとしたんだと思う。うちが中学に上がるときも遠くの私立に行かせたり。今の家もわざわざ部落外に土地を買って家を建てたり。」

父親は部落に隣接する部落外に土地を買い、今まで建て与えていた。

「けど、いくらそんなことしたって、周りのみんなは知っている。それでも父さんは、私をどうに

や子どもだけでなく、大人も簡単に騙される。だから、杏奈には正しい情報を入れておきたい。さもないければ……。

中学生の頃、とにかく両親はよく学校の先生と話していた。会があると言えば夜でも出向き、それに応えてかどうか、学校の先生もよくうちに来た。バーベキュー大会で俺たち子どもはワイワイと楽しみ、親や先生たちは酒を飲みかわしていた。だからどこか俺たちにとって学校の先生は近い存在だったように思う。学校に媚びるのではない。心の距離を縮めていたのだと思う。そうやって信頼関係を築いていたのだと思う。だから逆に言えば俺たちは、悪さができなかった。もししても、親が責めるのは、いつも俺たちだった。その分、差別やいじめ、不当なことは訴えていけば、先生たちは誤魔化しも言い訳もせず、きちんと非を認めていたように思う。そしてまた、一緒に飲んでいた。

親たちはそこまでして我が子を守り抜こうとしたのだということが、今になって分かる。それは

かして差別から遠ざけたかったんだと思う。そんなこと無理やのに。」

彼女の父親の気持ちが痛いくらいに分かる。そして、何も言えない。否定できない。その気持ちは俺も同じだからだ。我が子を守り抜きたい気持ちは同じだからだ。

「そんなことしたって」の言葉に、蔑みを感じない。親の心からの思いや願い、それに対する大いなる感謝の気持ちしか感じられない。父親に、「それは違う」と言いきれない切なさが溢れている。「ありがとう」の気持ちが溢れている。そのことが悔しい。

\*

今日来る前も、今までずっと娘に言えなかったことがあつて。

「学習会」っていう言葉を言えなかったんです。娘に何か怖い話して、とせがまれることがあるんです。実は学習会に行った帰り道に怖い出来事に遭ったことがあつて。心霊系のやつ。そういう話をするんですけど、その出だしが、「塾みたいいな

とこ行って、その帰り道にこういう経験をして。」っていう言い方しかできなくて。学習会の「が」まできてるんだけど、出てこないんです。伝えても分らないっていうんじゃないで、「学習会」って言ったら、学習会の説明をして。したら、こういうことなんだって、また説明しないといけないっていうのができなかったんです。

\*

## 学習会――

今も思い出す、懐かしい場所。懐かしい風景。言にくいこと、言にくいとき、必ずこうなるのは俺だけか。余計なことを考えすぎなのだろうか。何も考えずにスッと言えばいいのだろうか。いやしかし、それが俺にはできないでいた。

俺たちが通っていた「学習会」の正式名称が「同和対象地区学習会」という、同和対策特別事業で、県によってその名称も取り組み方もまったく違うということを知ったのは、中学を卒業したあとだった。だから、県内のいろんなところに、思う以上に多くの学習会があることを知って、俺

かったため、そこで結婚式を挙げたこともあったらしい。

秋の文化祭のときには体育館で学習発表会もした。親や地域の人がこぞって集まり、俺たちのさやかな発表や劇を観ては喜んでくれた。体育館もそうだが、教室の壁には習字や水彩画が飾られ、学習机には様々な作品が並べられていた。本当に小ぢんまりとした、ささやかな地域のお祭りだ。

文化祭のとき、建物の外で出店が出る学習会場もあった。出店と言っても、近所によく見知ったおっちゃんやおばちゃんを中心となって、焼きそばやら、ジュースやら、アイスクリームを格安で売ってくれる、子ども遊びのようなものだ。しかし俺たちにはそれで十分だった。むしろそれが良かった。街なかの大きな祭りもいいが、そこにある手づくり感が何より良かった。安心感があった。

そして、何より人を集めたのが、「早つき」と相撲だ。相撲は、過去に地元から幕内力士も輩出したらしい。それもあって、昔から伝統として受け継がれている。

は驚いた。しかもそれは県外にもあって、同じ立場の仲間が大勢いることにも驚いた。同じ立場であるかどうかは重要でないように思うが、やはり重要なことのようにも思う。同じ立場だからこそ分かり合えると思えることはあるし、立場が違ふと基本的なことからまったく分かってもらえないことも多くあった。

俺たちの中学には、五つの学習会場があった。もちろんそれは部落のなかにあったが、その規模には大小があった。二つの小学校や中学校に近い学習会場の規模は大きく、立派な鉄筋コンクリート建てで、二階建てだったり、三階建てだったり、ステージ付きの広間があったりもした。なかには屋内体育館がある会場もあり、そこでハンドベイスポールやドッジボールをして遊ぶ時間があることを、同じ部落の仲間から聞いてうらやましい気持ちになったこともあった。いくつもある部屋の中には、結婚式場まであった。俺の記憶にある限り、そこで結婚式が行われたことはないが、俺たちの親世代では、手狭だった家で結婚式はできな

「早つき」は、地域の伝統芸能と言ってもいい。何しろ見事だ。俺のいる地域ではない部落の伝統文化だが、餅つきを威勢よく、掛け声に合わせて、だんだんとペースを上げながらついていくものだ。不思議とみんなが笑顔になる。つき手も、あまりに速いテンポが可笑しくて笑いが込み上げてくるのだろうが、それは見る側にも同じ現象が起きる。最後にはつき手も、見る側も、大笑いして、拍手喝采で餅つきを終える。そして、餡餅がふるまわれる。笑顔になって、腹も満たされ、心も満たされ、最早それは小さな町のエンターテインメントだった。県外にはそれで全国的に有名になっている芸能もあるようだが、それとはどこが違う。妙に飾り立てられ、洗練されているのではなく、素朴であり、庶民的なのだ。子ども心に、そこに魅力を感じていた。

「早つき」は、かつて仕事の無い時季、特に年末年始、数人で組んで関西地方を中心に稼ぎに回っていた名残だという。つまり、派手なエンターテインメントのように見られがちだが、その実、

稼ぎの足しに、故郷を離れ、重い荷を運んで各地を転々と巡っていた行商のようなものだ。決して笑ってばかりいられるものではなかったはずだ。それでも、笑って町々に、人々に、福を授けて回った。だからこそ、なおいっそう、つき手であるじいちゃんたちの笑いに、深みを感じる。その「早つき」も、今ではじいちゃんたち世代しか、つくことはできない。その下の世代からは、出稼ぎの経験がないからだ。それが喜ばしいことなのか、残念なことなのか。

学習会は当時、その多くの時間が、学校の宿題をしたり、学力補充をしたりする、学習の場だった。週に二回、決まった曜日に、小学生は学校が終わるとすぐ、中学生は部活が終わった後の夜に、会場に集まり学習に励んだ。しかし、行きたかったかと言われると、そうでもなかった。なぜなら、小学校時代は、したくもない勉強をさせられていたから。少年サッカーに行けないということもあった。何と言っても、放課後の自由な時間を束縛された。それは中学に入っても同じだった。夜の

か。」

どことなく、そんな声が聞こえていたような気がする。だからその言葉だけを鵜呑みにしていた頃の俺は、どこか後ろめたさを感じていた。今なら言い返すことも、説明することもできる。しかし、小中学生の俺たちに、それは無理だった。だから、どことなく投げかけられるそんな声を、静かに背中で受けるしかなかった。いつの間にか背中には、無数の切り傷がついていた。

学習会に來ない仲間、來なくなった仲間もいた。理由は分らない。しかし、そんなふうに言われたくないとか、そう言われるのを避けて、來なくなった奴もいたのかもしれない。「ずるい」と思うこともあった。が、來たくなる気持ちも分らないわけではなかった。だからそっとしておくより他なかった。來なくなった仲間や、來なかった仲間たちは、今どこでどうしているのだろうか。苦しい思いを一人抱え込んではいないだろうか。俺が氣にすることではないのかもしれないが、どうしても思ってしまう。

七時から九時といえば、テレビといえばゴールデンタイムだ。見ようが見まいが、学校が終わわり、部活で疲れ、ゆっくりできる時間帯であることに変わりはない。その時間を、なぜにわざわざ学習会に行かなければならないのか。反発心もないわけではなかったが、とにかく親は言った。

「学習会には行っとけ。行かなアカン。」

その言葉に気圧され、行っていたように思う。その理由も知らずに。しかし、それだけ言うということは、それなりに大事な場であるということには伝わっていた。だから、文句も言わずに行っていた。

ところがその表面的な状況だけを見て、部落外の友達や親たちが良く思ってたことも、何となく伝わっていた。

「先生に勉強教えてもらえていいな。」

「どうして部落の子だけ先生から勉強教えてもらえるん。」

「部落の子を優遇するのは逆差別ではないか。」

「学校の先生がそんな不公平なことをしているの

俺の通っていた学習会場は、五つある学習会場のなかでも一番小さかった。それこそコンクリート建てでもなければ、二階や三階があるわけでもなく、ステージ付きの広間があるわけでもなかった。木造平屋建ての小さな、ささやかな、かわいらしい建物だ。その代わりと言っては何だが、外には形ばかりのバスケットボール半面くらいのコートがあった。そこが俺の遊び場だ。といっても、小さな学習会場のため、他の会場とは違って、同級生は一人いるかいなかだ。それも女の子だけだから、一緒に外遊びをする、というわけにはいかない。だから小学生の時は、指導に来てくれた小学校の先生と、サッカーをして遊んだ。

その会場は、町中から外れた農園の中にある。だから周りは緑豊かだ。どうしてこんなところに部落がつくられたのか。その成り立ちに何らかの理由はあるのだと思うが、俺には分からない。近くには四国八十八か所の遍路道があり、川幅五メートルくらいの小川もある。そのあたりが影響していたのだろうか。

学習の場だったはずの学習会が、中学になると一転、部落問題の学習をすることが多くなった。小学六年生の終わりぐらいに、学校でする社会科の学習に合わせて、キミたちがこの歴史の中に出てくる被差別部落にあたる人間だ、と先生に教えられてから多くなった気がする。あの時だ。なぜ俺たちだけが学習会に来なければいけないかったのか、なぜ親があれだけ熱心に行くことを勧めたのか、なぜ俺たちだけ家でテレビが見られなかったのか、なぜ他の友達はいなかったのか、なぜ自分一人勉強しなければならなかったのか、なぜ、なぜ、なぜ、のすべてが一本の線でつながったのは。と同時に、その線は俺の胸を貫き、俺を大きくて重々しい何かに縛りつけた。それ以来、その線が俺を支配する。その支配を解き放ったのが、中学生になってからの部落問題学習だった。

自分の立場を知ったとき、ショックだったかといわれると、そうでもなかった気がする。というか、あまり実感として湧かなかった。どちらかといえば、一緒に学習会に来ていた他会場の仲間にも代え難い、宝物のような思い出に溢れた場所であることに変わりはない。

一番伝えたいことは、一番大切なこと。けど一番大切なことは、一番言いにくいこと。本当は伝えたいが、喉の奥につっかえてなかなか言葉が出てこない。そんな心情を、娘杏奈に対して俺は、何度も繰り返してきたのだ。

小学校、中学校時代と通っていた学習会に思いを馳せ、語り始める。言いたいのに言えない葛藤をずっと抱え続けていた学習会についての話は、次の瞬間、聞く者の意識を目覚めさせた。

\*

今日ね、来る前にね、ちょっと早く出て、自分が通った学習会場に娘を連れて行ってきました。現場にね。パパのルーツを知ってもらおうと思って。もしかしたら壊されてるんじゃないかな、とか思いながらも行って。

娘に、ここで実はお化け見になって言って。塾はこっちにあるんですよ。お化けのところも見て、学習会の方にも行って。

の距離が縮まった気がして、妙に嬉しかった。その仲間たちは、いろんな意味で、明らかに学校で存在感を放っていた。「廊下を走るな！」と、よく怒鳴られていた連中だ。だから、差別に対して怖さも感じなかった。むしろ、より一層学校を「支配」できるような気すらしていた。いろんな意味で俺たちは他の連中より、走っていた。

ところが、そこに鉄槌を下したのが、中学に入ってから部落問題学習だ。親の世代、またその上の世代、部落差別によって行けなかった学校、得られなかった学力、就きたくても就けなかった仕事、それらを何とかして糾したいと強く強く願う部落の先人の思いのもとに学習会はつくられた。そう言われたとき、いい加減なことではない、そう感じた。

今、法が切れ、学習会はなくなったらしい。形を変えて残っているところもあるらしいが、ほとんどがなくなったという。しかしそれでも、当時学習会に通っていた俺たちにとってそこは、気持ちの通じ合う、大切な仲間たちと過ごした、何物

学習会の会場に着いて車を降りて、ここでサッカーしたりとか、小学校の先生が来てとか、そういうやりとりをしながら、ここで勉強してたって。

\*

懐かしい思い出、思い出の場所。誰にも、そんな場所がある。それは、いくら言葉を尽くしても人に伝わるものではない。そして消えてなくなっても、記憶のなかにずっと残り続けるかけがえのない、誰にも侵すことのできない聖なる領域。俺にとってその一つが学習会場だった。

俺自身、あまり人様に自慢できるような、経済的に豊かといえるような生活環境ではなかった。

小学生のとき、陸上の全国大会に出場し、表彰台に上った。サッカーでも県の選抜チームに選ばれ、海外遠征にも参加した。しかし、それらにかかった費用が軽々しく出せるような環境でなかったことくらい、子どもの俺でも分かっていた。それでも親は俺の好きなようにさせてくれた。経済的に豊かでなくとも、子どもが財産のすべてと言わんばかりに育ててくれた。

戸建ての持ち家なんかではない。木造平屋建ての古びた借家だ。そこでささやかに、儉しく、誠実に生きてきた。欲と言えば、子どもが幸せになることだけと言ってもいい。父母にとってのそんな生活は今も変わらない。それを差別する人間がいたとすれば、人間じゃない。その確信は、俺の中で揺らぐことはない。だから俺は、決して恥じない。決して屈しない。

夏が来るとよく思い出す景色がある。

照りつける太陽。抜けるような青い空。とてつもなく高く立ち上る真っ白な雲。少し湿った、芝の香り。その匂いを嗅ぐと、あの試合を思い出す。中学校総合体育大会サッカー競技地区予選決勝。後半残り数分。0-1。敵は小学時代から常に県の決勝に進むような超エリートチーム。俺たちといえば、中央大会どころか、地区予選すら勝ち進めない弱小チーム。それでも俺たちもメンバーを集め、寒風吹きすさぶ冬の日も、じりじりと肌を焦がす音が聞こえるくらいの夏の日も、嫌にな

るくらい走り、全身がからからに干上がるまで練習をした。特に練習後の走り込みは尋常ではなかった。何しろ、中学校近くの駅から、山の奥にある次の駅まで走らされるのだから。試合に負けると、走って帰ることもあった。負け癖をつけてはいけないということらしいが、それは最早拷問である。今なら問題になる。無茶苦茶だ。

そんな練習指導によく来てくれていた平山コーチは、サッカー部のOBであり、大先輩であり、同じ部落出身の、近所の兄貴のような存在だった。「しんどいときこそ笑顔で」

あのころよくコーチが口にしていた言葉だ。

コーチの昔話は実に面白かった。練習試合に行くとたびに喧嘩だったとか、試合には高下駄で行ったとか、練習中に隣の梨畑の梨をたらふく盗っては食べていたとか。かといって練習の一環として、すぐ近くに流れる大きな川の下に架かる全長1キロの橋を走って渡り、対岸を上流に走っては、上に架かる橋を渡って帰ってくるとかいいう、今では信じ難いような練習をしていたという。どこまで

が本当かは分からないが。

コーチはとにかく声が大きかった。そして常に元気だった。厳しい練習をさせながら、いつも笑顔だった。笑顔で俺たちを叱咤激励した。だから、不思議と悲痛さは感じなかった。むしろ、いつの間にかそんな練習を馬鹿のように楽しんでる節さえあった。

そんなコーチの生い立ちを詳しく知ったのは、俺たちが大人になってからだ。

当時、市場で働いていたコーチは、朝の四時には起きて市場に出ていた。生鮮品を買い付け、県内各地のスーパーマーケットに配達していた。ときには県外まで買い付けに行くこともあったらしい。トラックでの配送を夕方には終わらせ、俺たちの練習時間が始まる前には、グラウンドのベンチに座っていた。「今日はいないでくれ」と、何度も願ったが、コーチは必ず座っていた。

コーチは、母親と命を引き換えにして産まれてきたらしい。だから子ども時代は、父親と叔母に育てられていたそうだ。ところがその父親も、中

学入学のその日に、亡くなったという。つまり、中学以降、「親なし」のなかで育ってきたということだ。

こんな話も聞いた。結婚を考えた彼女の親から反対されたことがあると。「親なし」だからという理由は表向きで、実際は「部落だから」ということらしい。また、配達に行った先で、玄関から中には入れてくれない家もあったと。同じ部落の友人の結婚式に呼ばれて行ったとき目の当たりにしたのは、相手側の席に誰も座っていなかったというこも。

しんどいときこそ笑顔で――

しんどそうに俯いていることは、負けを認めることになる。なにより相手がほくそ笑んでいることが一番悔しい。ならば、しんどいときこそ、笑顔で。コーチの言葉には、そんな反骨精神が刻まれているのかもしれない。

「苦しいことなんか、笑顔で迎え受けてやる」

俺たちが毎日の練習のなかで教わってきたのは、そんな、「生きていく術」のような、「生きる覚

悟」のようなものだったような気がする。そんな指導のおかげかどうかは分からないが、俺たちのチームにも強みが生まれていった。敵チームほどの総合力はないものの、俺のスピード、司令塔洋介のドリブル突破、そして俊也の、群を抜いて高いサッカーセンス。みんな部落の仲間だった。

俊也は一学年下だったが、とにかく身体能力が高かった。走っても速く、跳んでも高く、当たりは強く、ボールコントロールは柔らかく、勘は鋭く、非の打ちどころのないサッカー選手だ。その高い能力ゆえに、小学校時代に県選抜に選ばれ、中学に上がる時には町外のサッカーエリート私立中学に進学したほどだ。俊也をよく知る俺たちにすれば、応援したい気持ちはあるものの、それは同時に、自分たちのチーム力の低下につながるため、痛いところでもあった。

そんな俊也が、中学一年を終えると同時に、転校して帰ってくることを知った。聞くと、チーム

「簡単なことだろ。」

負けかけてるというのに、危機意識の感じられないふざけたような返答。

「いや、何の意味があるん。」

イラっとする俺に洋介が答える。

「まあ雰囲気や。盛り上げていこー！」

たったそれだけのことだった。たったそれだけのことが、どれだけ大きなことだったか、あとで俺たちは体感することになる。

後半が始まってすぐ、敵も三点差を開けてあまり見たのか、敵のパスミスを見逃さなかった俊也がボールを奪い、そのままゴールに一点をねじ込んだ。直後に、それは起こった。一人、二人、次から次へと、ゴールキーパーまでもが俊也のところに駆け寄り、ハイタッチを交わす。言葉はない。しかし、笑顔が起こる。雰囲気がよくなる。するとたちまち全員が、献身的に動こうとする。声を出すようになる。パスが通るようになる。何もかもが好転する。

まもなく二点目が入る。一点差に詰められた焦

の内紛で、サッカー部が解散になるという。俊也の、「プロサッカー選手になる」という夢を考えると、素直には喜べなかったが、自分たちのチームにとっては朗報だった。

ところが、帰ってきてすぐの春の公式戦。選手権地区予選。俊也の戦力アップを当て込んでいた気の緩みが出たのか、俺たちは初戦前半を0-3で終え、ベンチに帰ってきた。今までしてきたチームづくりには、俊也がうまく噛み合わなかった。どこかちぐはぐで、一つのミスが気持ちのずれを誘発していた。雰囲気が悪いまま、ずるずると失点を重ねていた。

そんなハーフタイムでベンチに帰ってきたとき、司令塔でキャプテンの洋介が一つの提案をした。

「焦らず、まず一点取りにしよう。それで俺からの提案なんやけど、点を入れたら必ず全員がそいつのところに行って、ハイタッチをする。」

「何なんそれ。」

戦術とは言えないような洋介の提案に、俺は面食らった。

りとハイタッチが敵を威圧する。前半と打って変わって、おもしろいようにパスは繋がり、相手ゴールネットを揺らす。焦りは焦りを生み、相手チーム内の雰囲気は悪化し、修正が利かない。その一方で俺たちは全力でサッカーを楽しんだ。

結果は後半だけで5-0。俊也が全5点をたたき出し、トータル5-3の奇跡的逆転勝利。敵チームにすれば、悪夢の敗退。相手チームの監督も、茫然としていた。それが見ていて可笑しかった。それが俊也の鮮烈なデビュー戦だった。その試合内容は噂になり、俊也はその中心にいた。

しかしそれは表面的なことであって、実はその仕掛けをしたのが洋介だったということを、他チームの人間は知らない。

類い稀なサッカー能力に相反し、俊也は決定的にコミュニケーション力に欠けていた。そのことを見抜いていた洋介が、ハイタッチ作戦を持ちかけたのだ。もちろんそれが成功する確証はなかった。たまたまうまくはまったただだが、ハイタッチが互いをリスペクトすることに間違いはなかつ



た。俊也を生かしたのは、洋介だった。

「俊也は今どうしてるん？」

八月末の夕刻、卓也と洋介の三人で久しぶりに飲みに出かけた。中学卒業から二十年以上経った今でも、たまにこうやって飲みに出る。

ひと月前の中学生集会での俺の行動、中学生に向けて話したことについて、知らせておきたかった。だからといって、何かを期待していたわけではないし、褒め称えてもらいたいわけでもない。批判であっても、非難であってもいい。それが意に反することであつたとしても、とにかく知っておいてほしかったのだ。今、自分が立つ現在地を知っておいてほしかった。それが語り合える関係性は、中学時代から変わらず、今もある。

飲みに出かけたといつても、地元の部落にあるお好み焼き屋、「こんどう」だ。自宅の敷地のプレハブを改装した、俺たちにとっては秘密基地のような存在。街中に飲みに行くのもいいが、この顔ぶれで飲むのなら、気心の知れた地元店がいい。

「いや、なれたよ。」

俺の破滅的な言葉に、洋介はあっけらかんと返す。

「なれんかったで。」

「ほれは結果論ぢやうかなあ。怪我がなかったらいっとったよ、アイツは。」

笑いで誤魔化しながら返す言葉にも、洋介は断言するように、何か確証があるかのように強く答えた。それは洋介の、拭えない希望、光なのかもしれない。

「そうかもしれんな——」

「——そんなあまい世界ではなさそうやけどな。」  
そう言いながら、鉄板の上でチリチリと音を立てて焦げているホルモンの欠片をつまみ、洋介は口に入れる。

同じ部落仲間だった俊也は小学校時代からサッカー漬けだったため、学習会には来ていなかった。だから自分の立場については曖昧だったし、中学一年間私学に通っていたため、なおいっそう部落問題学習からは遠ざかっていた。そんな俊也

店を切り盛りするおばちゃん先輩のお母さんで、何でも話せるし、無理な注文も聞いてくれる。気心の知れた、気の休まる秘密基地だ。

洋介がビールを片手に答える。

「たぶん大阪で就職しとると思うけど、詳しいことは分からんなあ。」

「そうか……。」

俊也は、俺たちが高校に行ったあと、中学三年のとき、県選抜から地方選抜に選ばれ、キャプテンとして全国トレセンに出場したことがきっかけで、高校は県外の有名強豪校からのスカウトを受けて進学した。何度も全国制覇をしたこともあるような、全国大会常連校だ。ところがさすがに全国区の強豪チームでレギュラーを獲得するのは難しく、怪我也あつて思うような結果は出せなかった。同じチームにはプロ選手になり、日本代表になった選手もいたが、最後のシーズンも、冬の選手権にも、俊也の名前はなかった。

「俊也でもプロにはなれんのんやもんな。」

が高校一年のときに県外から帰省して言った言葉に、衝撃を受けたことがある。

「差別はあるし、なくしていかなアカン。」

そんなことをハッキリと口にするような奴ではなかった。知識もなければ関心もないような奴だった。そんな俊也をいったい何が変わえたのか、訊いた。

「高校に入ってからすぐに、チームに在日の連れがおりて、そいつとめっちゃ仲良うなったんすよ。」

そういう道もあるのか、とハッとした。

「そいつんち焼肉屋で、よく呼ばれて食べさせてもらって。そのうちに、そいつの家族とも仲良うなって、在日のこととかが話に出るようになって。そしたら俺んちと似とるような気がして。」

感心しつつ、部落のことが素直に話せる関係が嬉しかった。俺たちにとって、部落の話ができるということは、気が許せる証でもあるからだ。いつもいつも、難しく堅苦しい話をするわけではないが、いざというときに話せるかどうかは大きい。それが話せない、息が詰まるような感じがする。

酸素の薄い世界でいるような感覚。それが、何でも話せるとなると途端、胸いっぱい空気吸える気がする。気持ちの問題だということは分かっている。しかし、その気持ちこそが大きい。

俊也は高校卒業後、スポーツ推薦で関西の大学に入ったらしい。俊也の家もそんなに裕福ではなかった。家族で大学に行った者など誰一人いなかったはずだ。だから俊也が唯一の大学卒の経歴を持つことになる。俊也だけでない。俺たちの周りの多くが高校卒業のあと、就職したり、専門学校に進んだり、行っても短大だった。四年生の大学に進んだ奴は少ない。国公立大学となればなおさらだ。それは、経済的な理由もある。以前は返す必要のない奨学金制度があったらしいが、俺たちのころには返さなければならなくなっていた。あとで返さなければならぬのなら、奨学金をもらっても仕方がない、と親は言っていた。それに、多くの親が大学には行っていない。その価値観による判断の方が大きかったように思う。だから、多くが大学には行かず、仕事に就くことが多かった。

どうなるか分からない。地区大会予選とはいえ、俺たちにとっては初制覇になる。是が非でも勝ちたい。幸運の女神がどちらに微笑むかだ。まだ分からない。

ハーフタイム。恨めしいくらいの夏の日差しに照りつけられたピッチから、ベンチにあるテントの陰に入り込む。ほどなくして、洋介が俺たちの前に立つ。

「最後は気力や。走り負けた方が負ける。ほなけん、絶対に走り負けんようにしよう。ほのうえでじゃ——」

眼をギラリとさせた洋介は、一つの作戦を示した。聞いたイレブンはハーフタイムを終え、胸に明らかな灯を宿し、ピッチに散っていった。

後半戦も一進一退の攻防が続く。細かいパスの精度や個人技など、総合的なチーム力により劣勢ではあったが、素早く強い当たりで敵選手を封じ込めていく。抜かれたとしても、必ずカバリングをし、厳しいタックルで難を回避した。こぼれ球は常に前線の俊也に供給するが、なかなか届か

大学がすべてとは思わない。行かなくても立派な人間はいっぱいいる。そんな人物を身の周りにたくさん見てきた。逆に、学歴だけでたいしたことない奴もいっぱい見てきた。文化の違いと言えばそれまでだが、もし部落差別が解消されているというならば、そういった部分も平等になっているはずだが、そうになっているだろうか。そこにまだ、差別の現実を感じる。すべてが解決したわけではないことを、政治の真ん中での連中は解っているのだろうか。

春の選手権における俊也の衝撃的な活躍は、敵チームも伝え聞いている。だからこそ前半は、下の学年であるにもかかわらず、俊也に二人を徹底マークにつけ、その動きは封じ込められた。平気でファールまがいの行為もしてきた。超エリートチームと言えども、その存在を認めていたということだろう。しかし、ビハインドは一点。一点を返しさえすれば、延長戦に持ち込める。もしかすると、PK戦にだって持ち込める。そうなれば、

ない。俊也が受けたとしても、瞬時に二人、三人で囲まれる。互いに必死の攻防だった。暑さが恨めしい。気が遠くなりそうになる自分を無理にでも引きずり出す。声も喉もからからで喉の奥がへばりつき、えずく。

一点、一点——

時間との勝負だった。残りどれくらいだろう。ベンチから、「ノータイム！ ノータイム！」と大きな声がかかる。

もうダメか、やはり無理か。

左サイドから自陣のゴールを見つめていた。隙をついて敵がシュートを打ってくる。それをゴールキーパーの覚が横っ飛びキャッチする。

「ナイス！ キーパー！」

刹那、みんなに電気が走った気がした。瞬時に起き上った覚が、ハーフライン手前に駆け上がった。いく洋介にスローイングする。受けた洋介が瞬発力を生かしてドリブル突破を試みる。そのスピードに敵ディフェンダーが吸い寄せられ、そしてその力強さに慄く。

終盤ラストでもこれだけの余力が残っているものか。

強引ともいえるドリブルは洋介の真骨頂だった。コースを右にとった瞬間、何が起こるか理解した。敵の視界から消えるように左のタッチライン上を膨らみながら全力で駆け出した俺をよそ眼に、洋介は左手で右コーナーフラッグを指さし大声で叫んだ。

走れー！

そこに俊也がいた。情報の入っている俊也に危機を察知した相手ディフェンダー全員が、指さした方に気をとられた次の瞬間、洋介は右足インステップで右コーナーフラッグ、ではなく逆サイド、つまり左サイドに大きく蹴りだした。そこに、走り込んだ俺がいた。ドンピシャ。遅い。俊也がおりとなりとなって引きつけられたことに気づくには、敵はあまりにも遅すぎた。俊也も、洋介も、俺も、ニヤリと笑った。そんな余裕などなかったはずなのに、それでも、胸が躍り、笑った。

あのあと、寝ころんだ芝の匂いが、今も忘れら

「おばちゃん、オムそばめし一つ。」

「はいよー、ちょっと待ってよ。」

この店のオリジナルメニュー。それがひと昔前から全国区になったのが、「そばめし」だ。そんなのが売り出されるよりもはるか昔から、それは俺たちのソウルフードだ。

「歩美ちゃんて、どうして俺らといたんだろ。」

グラスを持ちながらぼそりとつぶやく俺に、洋介が大きく突っ込んだ。

「はぁ？ お前のことが好きやったけんでないか。」

「いや、そういうんでなしに、なんで俺らとおったんかってことよ。」

中学時代、洋介や卓也とよく一緒にいたなかに、歩美という女の子がいた。確か、決勝戦も観に来ていた。試合後、大泣きしながら拍手をしていた姿が思い浮かぶ。

歩美とは、三人＋一人というのではなく、四人でいた、とってもいい。俺たちと同じ部落出身というわけでもなかったし、もちろん学習会に来

れない。

俺たちは、負けた。洋介のパスを受けた俺は、ゴールキーパーと一対一。しかも、キーパーは逆モーションだったため、簡単に右足インサイドでゴールネットに合わせるだけでよかった。たったそれだけの簡単なことなのに、俺はゴールを外した。クロスバー高く、蹴り上げてしまった。ゴールネットを揺らさないことが分かった瞬間、試合終了を告げるホイッスルが鳴った。芝生の上に倒れ込んだ俺は、真っ白だった。近くから敵チームの歓喜が聞こえる。ベンチからも、スタンドからも歓声が聞こえる。一本のパスが狙い通りにつながった快感が可笑しくて嬉しくて、笑いが込みあがるのに、涙がこぼれる。嬉しいのに悔しい。こいつらともうこんなふうに死力を尽くしたサッカーができないことが悔しく、寂しかった。泣いた。泣いた。大声をあげて泣いた。やっぱり、悔しい。あと一歩、あと数ミリ、俺たちに運があれば――俺たちの、俺の青春。

ていたわけでもなかった。だから俺たちと一緒にいる理由はなかったはずだ。中学二年のときに同じクラスになったのがきっかけだったのかもしれない。ショートカットの、目がクリっとした、よく笑う快活な女の子だった。

いつか、卓也に起きたカレー事件を教材にして学年全体で全体学習をしたとき、その恐怖心について次から次へと同じ立場の仲間が切実な思いを吐露していたとき、ある子が言った。

「どうしてそんなにみんなが怖がるのか分かりません。」

「えっ。」

一瞬時間が止まった気がした。

「どうして分からない？ 今までずっとみんな一緒に学習してきたじゃないか。」

この学習に否定的な子でもなければ、消極的な子でもなかった。どちらかといえば積極的な手を挙げ、共に闘ってくれるようなタイプの子だったように思う。そんな子から出た一言だったから、

余計に驚いた。そして、「分からないんだ」と、愕然とした。「立場が変われば分からないものか」という悔しさが込みあげてきた。

今思えば分からないわけでもない。他人のことなんて分からない。分かるはずがない。その分からないことを責められてもどうしようもない。だから、責めたところでどうしようもない。今、年月を重ね、冷静になって考えると分からなくもないが、あの頃はただショックで、「どうしてそんなことが分からないんだ。結局他人事だったのか」という怒りと悔しさと悲しさでいっぱいになったことを覚えている。

その学習の最中に発言したのが、歩美だった。いつも発言することのない彼女が、初めて手を挙げたような気がする。二百人もの前で。

大勢の前で発言をするというのは、普通に考えても手が震える。平常心ではいられない。言おうとしていたことが、立ち上がった途端飛んでしまい、頭が真っ白になる。それでも言おうとしていたことを絞り出すのだが、途中で自分が何を言

どうして彼女がそんな発言をしたのか。ずいぶんあとになって直接問いかけたことがあった。

「歩美ちゃん、あのときなんであの発表やったん？」

どうしてそんな話になったのか、話の流れはよく覚えていないが、中学三年の受験前、晴れた昼休み。二階のテラスでちょうど四人でいたときのことだ。

「あのときって？」

「ほれ、卓也のカレー事件で全体学習したとき。」

「うち何か言うたって。」

俺の問いにとぼけたのか、本当に忘れてしまっていたのか、グラウンドに視線を移した。

「言うたでー、家のこと。」

「あー、言よかったわ。」

「言よかった、言よかった。」

卓也も洋介も俺に追従し、歩美を追い詰める。

「うん……、何でだろ。」

諦めて観念したように、手すりに乗せた手に顎

ってるのか分からなくなる。頭に血がのぼり、顔が熱い。みんなの視線が急に恥ずかしくなり、上手くまとめられないままに、「以上です」と、ペタリとイスに座り込む。それからしばらくは、元の状態に戻るまで、手元にあるファイルを団扇代わりに、血ののぼった頭をバタバタと冷ます。

歩美が手を挙げたことにも驚いたが、もっと驚いたのは、その発言内容が話の流れからまったく逸脱していたことだった。部落差別の、しかも卓也に起きたカレー事件のことについて、それぞれの心情を述べているところに彼女が発した内容は、彼女自身の家族のことだった。両親が離婚していて、自分には母親しかいないこと。父親とは小学校二年生から会っていないこと。父親に会いたい気持ちがあるが、胸に残り続けていること。終始笑みをこぼしながら、ふざけたように話してはいたものの、それはいつ降り出してもおかしくない夏の夕空のようだった。心中は如何ばかりか、見ているこちらがハラハラしながら眺めたことをよく覚えてる。

を乗せたままつぶやく。

「あれは結構衝撃的やった。」

「えっ、そうなん？」

とっさに振り返り、卓也の言葉に反応する。

「うん、ほなって、歩美ちゃん手挙げるタイプでなかったし。」

「そうそう。」

「えー、うちおかしかったんかなあ。」

「いや、おかしくはなかった。逆に良かったよ。」

フォローになるかどうか分からない言葉を返すが、俺の本心であることに間違いはなかった。

「うん、完全に流れ切ったけど。」

そう言って洋介は爆笑した。

「えー、やっぱりおかしかったんでー。」

「いや、そうではないんよ。流れは全然違ったけど、何か良かった。」

洋介の方に膨れっ面を向けるが、そこでも肯定を受ける。

「うん、よかった。けど、あのタイミングで何で家の話だったん。」

あらためてグラウンドに向き直り、言葉を探す。「うん、何でだろ。自分でもよう覚えてないけど、……確か卓也くんがお母さんの話やお父さんの話して、真二くんもお父さんやお母さんの話し始めて。ほら初めは卓也くんのカレー事件の話やったけど、ほのうち家族の話になっていて、……けどうちにはお父さんおらんからそんな話はできなくて……。けどそのことがうちにとっては大事なことのよう思えてきて、卓也くんや真二くんや洋介くんのようにしゃべれることはないけど、そのことやったらしゃべれるし、それがうちの中で大切にしてきたことやと思って……。そしたらいつの間にか手挙げとった。」

真剣に聞いていたはずの三人が一瞬の間をおいて、一斉に笑った。

「手挙げとったって、それだけでよう手挙げれたな。」

「えー、ほなって、いつも真二くんとか卓也くんとか手挙げよんで。」

「ほらまあほうやけど。」

もあつたが、それ以上の関係になることはなかった。

おばちゃんが出来上がったオムそばめしを運んできて、三人の座る鉄板に滑らせる。ソースの焦げた香りが食欲をそそる。それぞれがコテを使って自分の分を取り分け口に運ぶ。エアコンで冷えた体に熱ものがちよいどいい。が、できたての熱さに堪えられず、はふはふ言いながらビールを流し込む。

「編みかけのマフラーやけど、もらってくれる？」

お母さんの言葉が、耳の奥から響いてくる。

歩美が高校を卒業したあと、進学をせずに入院していることを知ったのは、やはり暑くなり始めた、七月のことだ。卓也や洋介に連絡をとり、お見舞いの品を用意していたイベント気分は、病室に入って消え失せた。

病室は個室。なぜ個室であるのかすら、若かつ

やわらかな笑い声に、少しでも春の匂いが頬を撫でた。

あのときの四人には、上も下も、部落差別意識もなく、フラットな関係だったのだと思う。だから純粋に、俺らの最大価値に込めようと、自分の最大価値を差し出した。それが全体学習が生み出したものだった。みんなに等しく言う権利があり、そして聞き、考えた。彼女はあくまでもフラットな関係でいたいと願ったし、実際そうした。あのテラスでの会話が、今も焼きついて消えない。

そんな彼女が、中三のバレンタインの日、俺に義理かどうか分からないチョコをくれた。何も考えず、ただ「ありがとう」だけを返した。

俺たち男連中はその後、みんな違う高校へと進んだ。卓也は農業系、洋介は進学系、俺は商業系の高校だった。そして偶然かどうかは分からないが、歩美は俺と同じ高校に入り、俺が入ったサッカー部のマネージャーとして入部してくれた。ただ、部員とマネージャーとしての関係。帰り道こそ同じ方向だったから、自転車と一緒に帰ること

た俺たちには理解できていなかった。ベッドに横たわる彼女の姿に息を飲む。ただ事ではないことを、理屈抜きで理解する。青白くやせ細り、中学高校時代の澆溺としたイメージはまったくない。四人で馬鹿話をして笑っていたころの笑顔に変わりはなかったが、頬は痩せ、頭にはニット帽があった。

白血病。そんな身近に、テレビドラマのような出来事が起こることが、俄かには信じがたかった。楽しいはずの笑い話が、なかなか笑い顔にならない。それでも作り笑顔で、昔話を繰り広げる。

話の途中、歩美のお母さんが割って入った。

「みんな血液型は？」

唐突な問いかけに、それぞれが答える。俺の、

B型、にお母さんが応じた。

「歩美もB型なんやけど、真二くん献血してもらえん？」

予期せぬ願いに、一瞬三人が視線を絡ませる。三人とも同じことを思ったことを、その眼差しで理解する。

俺たちには血にまつわるトラウマがある。

自分で自分の血が穢れているなどと思ったことはない。しかし、周囲の認識は違った。先輩のなかには、「部落の血は緑だ」と言われ、「俺がその部落の人間だ」と、怒りとも悲しみともつかない感情をぶつけた人がいた。仲間のなかには、「部落の血は穢れている。うちの家系に部落の血はいらん」と、結婚を断られた奴もいた。血に綺麗も穢いもあるものか。この時代のどこに、血が緑だと教える教師がいるか。どんな科学的認識をすればそんな発想になるのか。訊けるものなら訊いてみたい。しかし、平然とそういうことを言う人間がいる。それが宗教からくるものなのか、いや宗教に依存しているようで依存していない現代社会を考えると、感覚的なものなのか、いまだに判別がつかない。

歩美のお母さんが、同じ校区内で俺たちの出自を知らないはずがない。そのうえで、分かっただけで言葉を発しているのだろう。

何も言わずに、お母さんの言葉に従い、献血を

「……今朝早くに、歩美が亡くなりました。生前は仲良くしてくれて——」

あとのことはよく聞き取れなかった。お母さんが涙声になったこともあるが、それはあまりにもショックすぎて、よく覚えていない。自分が何を言ったのか、言わなかったのか、とにかくあまりにショックすぎた。ショックすぎて何をどうすればいいのか、まったく分からなかった。

気がつけば、電話を切ったあと、卓也に電話をしていた。

何かをした罪で命を失うのならまだ分からないでもない。では彼女がいったい何をしたのか。命とはそんなに簡単に消えてしまうものか。いや、簡単ではない。一年近い闘病生活を考えると。それでも命は消えてしまう。いとも簡単に消えてしまう。それが命だ。ではその命をどう使う。自分はどう使っているのか。ちゃんと使えているのか。使っていないのか。彼女の為でなく、誰かの為でもなく、自分の為にちゃんと使えているのか。自分は何をしているのか。彼女に何をしてきたのか。

受けた。俺たちは歩美の快方を疑うことなく、病室を後にした。

同年、年の瀬も押し迫った、凍えるような早朝。まだ薄暗い時間に、家の電話が鳴る。

「真二ー。」

母の呼ぶ声に、自分へのものであることを知る。「何なんだ、こんな時間に」と、寒さに身を縮めながら、受話器をとる。

「もしもし、野田ですが。」

迷惑だと言わんばかりに応える俺に、ていねいな女性の声が応じる。

「おはようございます。朝早くに失礼します。」

「あ、はい。」

自分の声色を正す。

「真二くんですか？」

「誰？」自分の名を呼ばれることで、声の主の心当たりに、全力で検索をかける。

「松丸歩美の母です。」

瞬時に嫌な予感がよぎる。

か。彼女に何をしてこられたのか。自分は本当に生きているのか。ちゃんと生きているのか。自分は何をしているのか。何のために生まれてきたのか。何のために生きているのか。いったい自分は何者か。

泣きながら、意味の分からないことを吐き捨てるように卓也にしゃべり続けていた。

薄暗い夕映えの空。冬枯れの北風が吹きつけるその日の夕刻。三人は待ち合わせをし、お通夜へと向かう。言葉少なく、居間に通され、彼女の安らかな寝顔を見る。胸が痛む。学生時代のはじけるような笑顔が、脳裏に浮かんで消え、浮かんでは消える。

「編みかけのマフラーやけど、もらってくれん？」

生前、病に伏せながらも、ベッドの上で編んでいたのだという。

いつからだったんだろう。バレンティンのチョコは義理ではなかったのか。マネージャーとして

の献身も、一途さからなのか。俺は彼女に何かしてあげられただろうか。

お母さんの言葉に怯んだ。応じることができなかった。こんな自分にもらう資格はない。それに、重すぎる。そう思った身勝手さを、今になって恥じる。

母一人、子一人の一人娘に先立たれる親の思い。この子のためなら何だって聞いてやりたいと強く願う親の思い。どうしてこの子なのか、神も仏もないものか、どうして自分でなくこの子なのか。自分が身代わりになれるものなら、と祈るような気持ちで我が子の寝顔を眺める親の思い。そのためになら悪魔にだって魂を売っていいとさえ思えてしまう親の思い。そんな思いが叶えられることなく、それでもこの先、生き続けなければならぬ人生をどう生きていけばいいのか、途方に暮れる親の思い。そんな思いを俺は踏みにじったのではないか。

今でも思う。もらっておけばよかったのだろうか、と。

は人それぞれ違うと思うんです。自分は部落問題、部落差別についてとこでずっときたけれども、この学習をすることによってつながれた人ってすごく多いんです。ホントにそう。こういうところにつながった仲間って、ずっとつながってるんです。それがすごい誇りで。しんどいときに、ものが言えるんです。相談にも乗れる。しかも期限がなくて、十年たつてようが二十年たつてようが、成立してしまっているのが、すごいところなんです。言いたいことが言えて、抱えてることもちゃんと言えて。ちゃんと向き合ってくれるっていうのが、この会の、この学習の素晴らしさ。しんどいことを言うことの大切さっていうのを教えてくれるっていうのは、こういう場。自分たちにとっては中学校の全体学習とかがそうだった。それぐらいすごく大事にしている学習なんです。

\*

人により価値観は違う。そのどれもが尊重されなければならぬ。人の命と幸せを奪うものでさえなければ。俺の価値観は、その経験によって培

「歩美ちゃんなあ。」

卓也がつぶやいて、残ったオムそばめしを一口、口に運ぶ。

「ええ子やったなあ。おばちゃん、ビールもう一本。ほれと、中華そば一つ。」

洋介が締めに入った。そして、一言つけ加える。

「ほんまやったらここにおったんかもしれんなあ。」

四人掛けの鉄板テーブルの残ったイスに視線が行く。冷えたビールを差し出され、温んだビールを飲みほした。彼女は今も俺たちの中に生きていく。忘れ消えることはない。若すぎたあのころの、俺たちにとって忘れられない出来事だった。

娘にはそんな友がいるだろうか。そんな友ができるだろうか。そんな思い出ができるだろうか。

\*

結局、娘に何を伝えたいか、みんなにも何を伝えたいかっていったら、抱えてる問題っていうの

われてきたものだ。だから俺の価値観は俺だけのものだ。したがって俺と同じ経験をしてきた者も、その価値観は自ずと似てくるのだろう。

しかし俺とまったく違う経験をした人は、俺とは違った価値観をもっているはずだ。それはそれで認められなければならない。俺の価値観を押しつけるわけにはいかない。だが、互いの思いを共有できる親友のような存在の必要性は、どんな価値観であっても変わらない、普遍的なものではないだろうか。それを俺たちは、学年全体で紡いできた。紡ごうとしてきた。同級生、同世代の人間が、どんな立場で生き、どんなことを経験し、どんなことを考え、悩み、生きているのか。全体で共有することを当たり前としながら、中学生生活を過ごしてきた。そのなかから生まれた親友だからこそ、本当に何でも言い合えるし、本音で向き合うことができる。これは、経験していない者には分らない、経験した者にしか分からない世界なのだと思う。

経験していない者にも、それなりの親友は存在

するだろう。それを否定するつもりはない。ただ、俺たちは、単なる仲良しだけではないということ、は確実に言える。

世の中が怪しくなってきた。猜疑心に満ち満ちているように感じることもある。リアルなつきあいの中で、人は居心地の良さや信頼を感じることもあれば、行き違いや感情のもつれでトラブルになることもある。しかしそのトラブルを解決するのも、リアルな世界だ。それを避けて通っていれどくなるか。トラブルになるようなことは避け、もしトラブルになっても、解決することを避け、そんななかで人間関係は生まれていくのだろうか。固定化した関係は育まれていくのだろうか。しかしそれは広がりを見せるだろうか。固定化された中で守りに入り、その外側には常に猜疑心を持ち、敵とみなせば、徹底的にディスリ、追い詰めていく。ディスラれることを恐れ、軽々しくものが言えなくなる。言って敵視の対象になるくらいなら、言わない選択をする。そして、もの言わぬ社会は、もの言えぬ社会へと変貌していく。それが人権が

尊重された社会と言えるだろうか。俺たちがしてきたことは、そんな世の中の流れに対する抵抗であり、警笛であり、挑戦だったように思えてくる。中学生集会での語りも、いよいよ最後の下りとなる。

\*

部落差別は絶対あつてはならないんです。あつてはいけないことだから、やらなければいい、じやない。やるから残るってなるかも分からないんだけど、そんなわけないって。なくしたことになるってしまったらダメだと思ふし、自分たちはその差別に向かって闘い続けたいといけなしいし、絶対に負けてはいけなしいと思ふんです。

\*

先生、あのころ先生たちはいつも言ってたよな。「みんなには悪いことなんて何一つない。差別はする方が悪い。だからみんなは当たり前前に、普通に堂々としてればいい」って。

先生、みんなどこ行つた？ 先生は今でもあの頃のように言える？ 言ってくれてる？ 退職し

て先生が終わった途端、口を閉じたりなんかしてない？ あのととき言ったことは本当だったって、今でもちゃんとと言える？

堂々と言つてもいいんだよな。言つてもちゃんとみんな受け止めてくれるんだよな。恥ずかしいことなんてないんだよな。ねえ、先生。

先生、俺たちの仲間の多くが、何も言えないんだよ。もう言う必要はないって強がってる奴もいる。言つた後のことを恐れて言えない奴もいる。職場の連中にも、パートナーにさえも、我が子に。けど、本当に言わなくていいんだろうか。故郷はどこ？ って訊かれるんだよ。里帰りだってするんだよ。親父や母さんにだって子どもを会わせるんだよ。子どもだっていずれ、恋もするんだよ。そいつが弱いのかなあ。そいつらがダメなんだろうか。悪いのはそいつらなんだろうか。いつも考えてしまうんだ。

「あたり前」のことが「あたり前」にできないと、どうなるか分かる？ どうやら人って、「自分が悪い」って思ってしまうみたいで。だから、言

うのが「あたり前」のように教えられてきた俺たちは言えないと、「自分が悪い」って思ってしまうんだ。そんなふうにしたのは先生なんじゃないのって思ってしまうんだ。責任転嫁かな。やっぱり俺たちが悪いのかなあ。誰が悪いんだろ。俺たちか？ 先生か？ それとも、あのころという時代なのか？

「人権部なんているの？」

「他の部と一緒にすれば。」

「いや、そもそも人権部なんていらなくない？」  
娘のPTA専門部の会合なんかで、そんな声が聞こえてくるんだ。どうしてそんなになってしまったんだろう。

俺が当たり前に体験してきたことは、俺以外の人間には分らない。差別の現実も、知って初めて理解する。でも知らなければ、理解のしようがない。以前から知ろうとしない人はいたよ。けど今、多くの人がそうになっている気がするんだ。いずれにしても、知らない人には差別は見えない。差別が見えないと、差別はないことになる。ないのな



らば、学習する必要はない、となる。どうすれば知れるんだろうか。やっぱり俺たちが伝えないといけないということなのだろうか。俺が、俺たちがリスクを抱えながら、踏まれている足の痛みを訴えなければならぬということだろうか。痛いから踏んでいるその足をどけてくれ、と言わなければならぬということなのだろうか。そこにあるリスクを抱えたままで。けど、言えば本当に受け止めてくれるんだろうか。

俺らが子どものときは、親はよくPTAの会に出てたよ。帰ってきてからも特に何も言わないから、会の中身なんて分からなかった。けど、親の機嫌がよかったことだけは、何となく伝わってきた。だから親と先生はいい関係なんだって思った。それだけでなんか、安心した。

よく飲みに行ったりもしたな。うちにも飲みに来てた。ていうか、うちの親も強引で、家庭訪問がそのまま飲み会になってたりもした。あのときの気まずささらなかったよ。それでも、悪い気はしなかった。みんな笑ってたから。学校でバ

ちまうよ。勉強が大事じゃないとは言わないけど、それよりも大事なことを大事にしないと。

「ほなおばちゃん、ありがとう。」

「氣いつけて帰りよ。」

お盆も過ぎると、朝夕は少しだけ、暑さが和らぐ。

店を出てすぐに、学習会場の一つにさしかかる。立派な体育館付きの学習会場だ。よくここにも来た。祭りのときは必ず来た。出店に、相撲に、早つき。まるでおもちゃ箱をひっくり返したような賑わいだった。子どもにとってはたまらない楽しみ場だった。それは今でも変わらない。

「それで、季実ちゃんは家を出て行ったと。」

「……うん、まあ。」

歯切れの悪い返事に、洋介も卓也も返す言葉が見つからない。

中学生集会の翌日、季実子に、二人にしたような話を手紙に書いて渡した。すると、季実子は置き手紙を残して、杏奈と実家に帰ってしまった。

ーベキュー大会した時もあったっけ。秋だったっけな。少し涼しくなった学校の中庭でバーベキューコンロ出して、大人数でやったっけな。先生たちは親連中と大声上げて大笑いして、俺たちは俺たちで好きなようにやったりして。楽しかったよ、あのときは。

けど、違うんだ。今のPTAは。俺たちが見てきた親の姿がないんだ。遠いんだよ、先生が。学校が。人権も遠いんだよ。それが、そこが、何か……違うって思ってしまうんだ。なんかおかしいよ、今の教育。そんなの学校じゃないって。

部落問題や人権問題を一番に考えてきたじゃない。勉強が大事じゃないとは言わないけど、それよりもまず人権について学んで、友達からいろいろなこと学んで、そうやってきたじゃない。そうじゃないと、学校に行くのがしんどい子が出てくるんじゃないかって思うんだ。勉強ができない子、できても満足のいく評価をもらえずに、自分以下を探し出して満足しようとする子。こんなんじや、まっすぐに生きられないよ。人間性がねじ曲がっ

夏休みということもあるが、夏休みも残りわずかだが、帰ってくるという連絡はない。俺はいけないことをしたのだろうか。

「帰ってくるんちゃうん。」

卓也が言うが、気休めの一言であることは明らかで、つい、「ええ加減な奴やなー」と笑って返すしかなかった。故郷である部落を出ている身として、卓也も真二の気持ちはよく分かっていた。しかし、どうするかは各人に任されているし、どうしてもいいことも分かっていた。何が正解かは分からないし、どれも正解のように思える。そのすべてを互いに分かっているがゆえに、かける言葉が見つからない。

道端から、コオロギの声が聞こえてくる。飲んだ帰り道、少し温んだ夏の夜風が気持ちよくて、三人でふらふらと夜道を歩く。あのころとは違った新鮮さを感じる。いつ以来だろう。こんなにのんびりと懐かしい道を歩くのは。田舎道だから、街灯も少ないし、通る車もない。我が物顔で冷め始めたアスファルトを闊歩する。

「真二から連絡はせんのか？」

「うん……、まあいつかはするだろうけど。」

「独りになったらなつたで、どうにかなるよ。」

「いや、そういう問題ではないだろ。」

俺たちの周りには、子どもを連れて地元に戻ってきた仲間は結構いる。理由はさまざまだが、少なからずそのなかに、「部落」があったりする。そのことを指して言ったのだろう。両親が別れることが必ずしも不幸とは限らない。別れずに、不幸な光景を我が子に見せ続け、将来を悲観させるくらいなら、別れた方がいいこともあると思う。もちろん、別れずに幸せになればもったいいい。

俺も独りになるんだろうか――

この一カ月、独りで生活して気づいたことがあった。家事も炊事も、どれだけ季実子に任せきっていたか。俺もできないことはない。が、とにかく面倒くさいと感じる。疲れていたりと、帰りが遅くなるとなおさらだ。しかしそれは季実子も同じだったはず。どれだけ自分が不甲斐なかったかが、身に染みてよく分かった。しかしそんなことより

止めた。これは俺の問題だ。

歩くうちに中学校が近づいてきた。誰ともなく、行ってみるか、と口そろえる。年甲斐もなく、また気持ちがあつたところに引き戻される。

静まり返った夏休みの夜の学校。当たり前だが人はいない。校舎前の自転車置き場。昔と変わらない築山。職員室。中庭を囲むように立つ校舎。隣接する体育館。ここで俺たちは育った。部落差別とは何なのか、本当に差別はあるのか、差別はどうすればなくせるのか、他人事でなくせるのか、自分事にするとはどういうことなのか、卓也の悔し涙、仲間の怒り、立場を越えてつながれた感動、分かり合えることの喜び、今が永遠であればいいのに、と思えた、まっすぐに純粋な若い日の思い出。ガラス玉のような日々。忘れることはない。

二階への階段を上がる。廊下がむき出しで、壁のないモダンな構造だからこそこできることだ。不用心と言えば不用心だが、今日の俺たちのような卒業生にはありがたい。いつでも好きな時に来て、懐かしむことができる。

も、家に温度がなくなった痛手が、精神的に遙かに大きい。

誰もいなくなった家に帰ると、「ただいま」は部屋を彷徨い、廊下を彷徨い、行き着く当てもなくぐるぐる回り、そのまま静かに部屋の壁に吸い込まれていた。飾り棚に、キッチンのお器に、そこに貼られたキャラクターシールに、壁や廊下の傷一つ一つに、かつていた主たちの跡を見ては、どれもがかけがえのない宝物であることに気づかされる。そんな、独りに慣れていく空っぽの胸の中が、いくつもの輝きに満ちていたことに、今さらながら気づかされる。

「明日、小学校に行くんだろ？」

先頭を歩く洋介が、サンダルのかかとを鳴らしながら、振り向きもせずに関わりかける。ひと月前の話を受けて、杏奈の校長先生が教職員夏期研修の講師として真二を招いてくれた。明日がその日であるという現実を引き戻される。

「俺らの思い、いっぱい語ってきてよ。」

そう言う卓也に、お前も、と言いそうになって

階段を上がれば、テラスが広がる。中学三年の四人が、今でもそこにいるような気がする。手すりに置いた手に顎を乗せた歩美が見える気がする。

「真二」

洋介の声に振り返ろうとした刹那、声に反応した歩美も振り返り、そして消えた。しばしその場を見つめる。

街角に下校中の中高校生の姿を見かけると、学生時代を思い返し、今も胸に小さな痛みを感じることもある。その瑞瑞しい輝きに心臓がギュッと驚揺みにされ、同時に瞼の奥に熱いものを感じることがある。人が輝く瞬間など、そうあるものではない。ましてやずっと輝いてなどいられない。そんなものは一生のうち一瞬でもあればいい。それがスポーツであったとしても、何であったとしても。三年という時間の終焉や次のステージは、気がつけばいつの間にか目の前に迫っていた。すぐそこに迫っている別れなど、ずっと遠くのことのようなふりをして目を背け、未来への夢や希望に、明日の輝きに、突っ走っていた。それでも今

あるその瞬間瞬間に、安らぎや愛おしさを感じ過ぎていた。その感覚はきつと、そこにいる者だけにしか共有できない。それが体育祭だったり、文化祭だったり、合唱コンクールなのだと思う。遠足だったり、修学旅行だったり、卒業式なのだと思う。教室だったり、部活だったり、体育館だったり、学校なのだと思う。その世界は例え親であったとしても、本当の意味では理解できない。そういう意味で、学校という場は極めて特異な場だったと、大人の今になって思う。そんな場は学校以外には見つけられない。だからこそあの一瞬は、かけがえないものだったと思う。

三階のベランダからグラウンドを眺める。真っ暗で何も見えない。野球部のベンチ、鉄棒、砂場、テニスコート、土俵、サッカーゴール。見えないが、見える。あの頃の俺たちが見える。過ぎ去ったはずの風景が、あのころの仲間の姿が、鮮やかに臉に浮かぶ。あったことをなかったことにはできない。恥ずかしくもないことを恥じるわけにはいかない。自分の中にある正しさを貫いて生きて

いきたい。悔いのない生き方を、これからも生きていきたい。

遠くにぼつりぼつりと町の明かりが見える。空に夏の星々が瞬く。

明日、夏期研修で先生方に話をする。担任の先生と校長先生には直接話ししたものの、他にどんな先生がいるのか、部落差別をどう理解しているのか、俺のこともどこまで知っているのか分からないなかで話すことに、抵抗がないわけではない。ましてや、俺がカミングアウトすることは、杏奈にとってはアウティングになってしまう。そのリスクを、親であるとはいえ、別の人格である俺が背負えるのか。それは親の勝手であり、俺のエゴではないか。しかも今の俺は、季実子や杏奈と居を別になっている。そんな立場の俺が自分の立場を明かしてまで、娘の杏奈を危険に晒しているのか……。

明日はいつたい、どんな一日になるのか。

\*

俺にとっても、杏奈にとっても、特別な日にな

った気がします。

朝、家を出てから車の中で杏奈と二人きりの状態で、息が詰まりそうでした。今から行く場所、出来事を杏奈にどのように伝えることが正解なのか。

会場に行く前に立ち寄った、通い続けた学習会場。今までは、「塾みたいなのに通ってたよ」って伝えてたけど、「学習会」って名前をようやく出すことができました。自分の生きてきた、学んできたルーツを先ずは伝えておきたかったのです。それがやっとできました。

会場についてからは、中学生の会ということもありましたが、少しだけ自分の闘いとして話をさせてもらいました。いつも感極まる俺ですが、杏奈を不安な想いにさせるわけにいかないから泣いてはいけないと思っていましたが、込み上げる想いを止めることはできませんでした。舞台から話をする時も、杏奈に目を合わせることができませんでした。これが自分の中にある弱さです。

昼で帰る予定でしたが、杏奈から「もう少しお

りたい」「最後までおる」って言われたことで、救われる自分がありました。彼女の中で変わったこと、気づいたことは多くないと思いますが、終わった後に、「楽しかった!」と言った彼女の笑顔は、これからの生き方のスタートを意味するものであると確信しました。

帰ってからはテンション上がりまくりで、今日あった出来事を一生懸命伝えてましたね。

先生にこんなこと言われたよ。お姉ちゃんが泣きながらこんなこと言ってたよ、お兄ちゃんが何回も手を挙げて発表してたよ、などなど。嬉しそうに貴女に話してる姿を背中を黙って聞いていました。さらには彼女の口から、「部落差別」という言葉も出てきて。何とも言えない瞬間でした。

「親の生きざま、自分の生い立ち、この子の生き方」が縦に並んだ瞬間でした。

まだまだ部落問題の入り口でふわふわしている状態にあり、受け入れるまでこれから勉強する必要がありますが、今日の出来事を小学校の先生に報告し、一緒に杏奈の成長を見守ってもらおうと

思っています。

中学生のお姉ちゃんに、「また来てね」って言われた彼女がコクリと頷くシーンもあってホッコリしました。とても良い空間であると思ったのと同時に、これからの時代は本当に中途半端な教育ではダメなんだろうなとも思いました。自分で情報を入れて解釈し、行動にうつす時代です。何事も一人で抱え込まないことが重要です。あの場があるから言える、あの場があるから救われる、では事足りない気がしていて。友達の支え、自分の強さ、意志、すべてが必要になってくると思います。

今日の中学生たちが幸せを感じる為に、自分たちの世代もしっかり繋がっていかないとダメだと思いました。勉強させられました。

これから部落問題と関わる新しいステージにあつたため立つことになりましたが、家族みんなです、幸せの数を一つでも多く感じとれる生き方ができればと思います。

真二

のなかには、部落出身の真二という意味合いも含んできたはずだ。しかし、現実はあるように簡単にはいかなかった。真二のルーツが知れ渡っていくことで生じる、自分へのまなざし、娘へのまなざし。それに自分は耐えることができるだろうか。両親はそれを是とするだろうか。娘は……。

現代社会では簡単にSNSを使い、拡散し、誹謗中傷を重ねる。そして暴きに曝された者は、社会的に抹殺されていく。それに対する怯えが、自分を惑わせ、不安にさせる。迷いに迷い、悩みに悩むが、そのことを真二に伝えることができない。伝えても真二はきっとそれを受けとめ、自分なりのアドバイスを的確にしてくれるだろう。そんな姿も想像できる。しかし、その答えを自分は飲み込めるだろうか。真二ばかりに頼ってはいられない。自分は自分として、この問題に向き合わねばならない。その覚悟をして一緒になったはずではなかったか。あらためて今、向き合う覚悟が問われているが、それが今の自分にはできるだろうか。自分には重いのではないか。

\*

季実子が手紙を読んだのは、真二が中学生集会から帰ってきた翌朝だった。朝食の片づけをしていると、出勤前の真二がテーパール越しに声をかけた。

「手紙、書いたんやけど。」

「手紙？ 誰に？」

「季実子に。」

「私？ 何よいったい。」

笑って返す季実子に困った表情を浮かべたまま、テーパールに便箋を滑らせた。中身が前日の中学生集会に行ったことであろうことは容易に想像できた。しかし、それだけか、それ以外に何かあるのか。また、自分はこれからどうしていけばいいのか。季実子は何とはなしに悩んでいた。

真二が出動したあとすぐに読むと、季実子は逡巡として、置き手紙を書いた。

「少し帰ってきます。」

季実子は杏奈を連れて実家へと向かった。

真二と連れ添い、今まで共に生きてはきた。そ

「ママ、早くー。行くよー。」

「はい。」

あれから一カ月。季実子はあらためて読んだ手紙をバッグに仕舞い込むと、気が逸る杏奈を連れて、扉を開けた。

朝夕は多少涼しさも感じられるが、日中はまだ夏の暑さが残る。午後の日差しがきつい。歩いて向かう小学校までの道のりでぼんやりと信号待ちをしていると、スーッと背後から前方に、何かが体をかすめて抜けていった。見上げると、向かいのビルに向かって飛んだ鳥が、真っ直ぐ垂直にその小さな体を立ち上げ、飛び上がっていた。

あれはいつのことだっただろう。大都会の高層ビル、地上数百メートルで翼を休めていた鳥のことを思い出す。鷹だったのだろうか、鷲だったのだろうか。ビルの屋上で悠然と佇んでいたかと思うと、そのまま体を前方に預け、まっすぐ真下へと落ちていった。かと思うと、翼を目いっぱい広げ、滑空を始める。それはまるで遊覧飛行であ

り、宙を舞うことを楽しんでいるかのようであった。

果たしてあの鳥にためらいはないのだろうか。考えてみるが、あるわけがない。飛べるのだから、翼を広げ、飛べることが分かっているのだから、ためらう必要などない。ではなぜ、飛べると分かっているのか。自分に飛べるだけの翼があると知っているからか。だが、翼があるだけでは飛ぶことはできない。空気という抵抗を上手く乗りこなして始めて自由は手に入れることができる。ということは、まず翼が必要。そして、抵抗がある前提で、それをどう上手く乗りこなすか。その技術が必要だということになる。空気と言っても、じっとしていてくれるわけではない。それは時として不安定で、場合によっては牙をむき襲ってくる。それでも身を護るため、目的を果たすため、飛べねばならないこともある。

俺の翼は大丈夫だろうか。自由に飛び回るために、空気という抵抗を乗りこなせているだろうか。空気は生きるために必要なものである一方、自由

にスマホが鳴る。電源を切るのを忘れていたことに気づき、電源を切ろうと画面を見る。入っていたメッセージに思わず立ち止まる。季実子からだ。

「狭山事件、裁判所が証人尋問を決定」

えっ、胸がドクンと大きく鳴り、胸が、血が、肌が沸き立つ。

メッセージを打ち返す。

「今どこ？」

すぐに返信が入る。

「研修会場」

えっ、なんで？と打ち込むより先に、走り出す。あ、ちょっと、と呼び止める教頭先生の声が耳をかすめた。「廊下は走ってはいけません」あのころの先生の声が聞こえた気がして、可笑しくなった。光の筋が線を引く。

会場の扉を勢いよく開ける。その音に驚いたように、大勢の先生の視線が集まる。会場を見渡すと後方で、季実子と杏奈が扉の音に気づき、手を振った。

「季実子！ 杏奈！」

に飛び回るためにはどうしても扱いこなさねばならない厄介なものでもある。もしそれができなければ、たちまち地面に打ちつけられる。生きていくことはできない。

娘はこの先、自由に飛べるだろうか。自由に飛び回るために必要な空気のような存在を、乗りこなすことができるだろうか。

見上げたビルの上に、夏の終わりを告げるようなすじ雲が広がっていた。

俺にも翼があったら――

俺の生き様を、家族を、部落差別を、友との出会いとつながりを、この学習の大切さを伝えるのだ。これまでのすべてを晒し、訴えるのだ。きつと仲間になれる。扉を閉じてはいけない。可能性の扉を開くのだ。

ブーブー、ブーブー、ブッ

小学校の門をくぐり、職員室まで行くと、教頭先生が出迎えてくれた。そのまま教頭先生に連れられ、研修会が開かれる会場に移動している最中

イスに座る先生方の間をすり抜けるようにして走り寄り、思わず二人を抱きしめる。

「ちょっと、真ちゃん、みんなが。」

「パパー。」

人前の照れもあり、季実子は引きはがそうとするが、杏奈はがっしりと抱きつく。よく分からないうちから、その雰囲気を感じ取り、周囲からは祝福の拍手が自然と沸き上がる。

「えっ、なんで？」

「杏奈から聞いたのよ。真ちゃんが今日小学校の先生に話をするって。で、杏奈も聞きたいっていうから、一緒に来てみたんやけど。そしたらさっき突然、狭山のニュースが入ってきて。」

「そうか。」

裁判所が証人尋問をするかどうか、再審に向けた最大の、決定的な山場であることを、以前季実子と話したことを思い出す。もし証人尋問が行われれば、十中八九再審の扉は開かれる。再審の扉が開かれるということは、無罪を勝ち取るということだ。数十年の時を経て、ようやく人として

還ってこられる。俺だけではない。俺の仲間たちの、これまでかわってきた多くの人たちの思いの結実だ。それは石川一雄さんだけの問題ではない。俺たち部落に生まれた人間の、部落民として生きている人間にとっての、人間性回復の象徴だ。翼の獲得であり、自由の復元だ。これ以上の喜びはない。至福の瞬間となる。たまらない思いが込み上げる。

「杏奈、石川さんの潔白が証明されるぞ。」

「けっばく？」

怪訝な表情に、しゃがみこんで言葉を添える。

「無実だ。無実が証明されるんだ。」

「そうか、無実になるのか。」

「そうだ。無実になるんだ。」

自分で言っておいて、感極まる。

涙目で季実子を見上げると、彼女も俺を見つめていた。

「ねえ、今日、うちに帰ってもいいかなあ。」

えっ。一瞬間が開くが、さらに、どう？と季実子は問いかけてきた。思わず笑みがこぼれる。

い安っぽいのに、それは絶対に手に入れることはできない。絶対に。

あの頃のガラス玉は、今も俺たちの中に確かにある。瑞瑞しく確かに輝きを放ち、今も俺たちの胸の中にある。確かにある。

堂々と胸を張り、舞台に立つ。

差別でも何でもかかってこい。笑顔で迎え受けてやる。

見てろ、これが俺たちの、未来だ。

顔を上げたその先、夏の名残りの空の向こう側に、幾筋もの光の筋が立ち上がり、絡み合い、真っ青な天に向かって、まっすぐに。まっすぐに。

「当たり前でないか。みんなの家なんやから。」

そのやり取りを聞いていた杏奈の表情が笑顔で溢れていく。

「おかえり。」

季実子が、うん、と頷く。この一カ月、何をどう考え、帰宅するに至ったのか、また二人で語り合うことになるのだろう。言葉に言葉が返される。思いに思いが返される。どんなに時代が進んでも、そのことに変わりはない。悪意が返されることもあるだろう。だが、俺は屈しない。その営みを止めることはない。諦めない限り、俺たちが負けることはない。父母が、祖父母がそうやって生きてきたように、俺も生きていく。生き抜いていく。

「ほら、みんな待ってるよ。」

季実子の催促に大きく頷き、ぐんと大きく一歩を踏み出す。二歩、三歩、振り返ると、最後列で季実子と杏奈が笑顔で小さく手を振る姿が見える。

あの頃の俺たちはまるで、透明な金魚鉢に沈むガラス玉のようだった。お小遣いでも買えるくら